マンチェスターシティ 24-25 シーズンの考察 ～前半戦と後半戦~

82 回生 MINATO

■ 前半戦の結果

2024-25シーズンの前半戦、マンチェスター・シティは予想外の苦戦を強いられました。プレミアリーグでは既に6敗を喫し、首位リヴァプールに16ポイント差をつけられる状況となっています。 この不振の要因として、以下の点が挙げられます。

1. 主力選手の負傷離脱：中盤の要であるロドリが前十字靭帯を断裂し、シーズン全休を余儀なくされました。彼の不在はチームの守備的安定性に大きな影響を及ぼしています。また、ケヴィン・デ・ブライネやルベン・ディアス、ジャック・グリーリッシュなどの主力選手も負傷により欠場が続き、チーム全体のパフォーマンスに影響を及ぼしています。

2. 戦術的な問題：ペップ・グアルディオラ監督の戦術が他チームに研究され、特にマンマーク戦術に対する脆弱性が露呈しています。これにより、攻守のバランスが崩れ、守備面での脆さが目立つようになりました。

3. パフォーマンスの低下や負傷リスクが増加しています。また、新加入選手の適応が遅れており、チーム全体の連携に課題が残っています。

4. 精神的な疲労とモチベーションの低下：連覇を続けてきたことによる精神的な疲労や、モチベーションの維持が難しくなっている可能性があります。これがプレーの質や集中力の低下につながっていると考えられます。

■ 前半戦の主要なフォーメーション：4-3-3

・ゴールキーパー（GK）：エデルソン

・ディフェンダー（DF）：

　〇右サイドバック（RB）：カイル・ウォーカー

　〇センターバック（CB）：ルベン・ディアス

　〇センターバック（CB）：マヌエル・アカンジｓ

　〇左サイドバック（LB）：ジョアン・カンセロ

・ミッドフィルダー（MF）：

　〇守備的ミッドフィルダー（CDM）：ロドリ

　〇中央ミッドフィルダー（CM）：ケヴィン・デ・ブライネ

○中央ミッドフィルダー（CM）：ベルナルド・シウバ

・フォワード（FW）：

○右ウィング（RW）：フィル・フォーデン

○センターフォワード（CF）：アーリング・ハーランド

○左ウィング（LW）：ジャック・グリーリッシュ

ロドリが中盤の底で守備の安定を図り、デ・ブライネとベルナルド・シウバが攻撃の起点となる役割を担っていました。また、サイドバックのカンセロとウォーカーが積極的に攻撃参加し、ウィングのフォーデンとグリーリッシュがカットインして中央での得点機会を狙う形が多く見られました。

■ 各ポジションの役割詳細

・ゴールキーパー（GK）：エデルソン

最終防衛ラインとしてゴールを守るだけでなく、優れたキック精度を活かしてビルドアップの起点となります。

・ディフェンダー（DF）：

右サイドバック（RB）：カイル・ウォーカー

スピードを活かして右サイドの攻守に貢献し、相手のウィンガーを抑えつつ、攻撃時にはオーバーラップしてクロスを供給します。

センターバック（CB）：ルベン・ディアス

守備のリーダーとして組織を統率し、高いフィジカルと読みで相手の攻撃を阻止します。

センターバック（CB）：マヌエル・アカンジ

ディアスと連携し、堅固な守備を構築します。

左サイドバック（LB）：ジョアン・カンセロ

テクニックと視野の広さを活かし、攻撃時には中盤に絞ってプレーメーカーの役割も果たします。

・ミッドフィルダー（MF）：

守備的ミッドフィルダー（CDM）：ロドリ

中盤の底で相手の攻撃を遮断し、攻撃の起点となるパスを供給します。

中央ミッドフィルダー（CM）：ケヴィン・デ・ブライネ

高い創造性と精度の高いパスで攻撃を組み立て、得点機会を演出します。

中央ミッドフィルダー（CM）：ベルナルド・シウバ

テクニックと運動量で攻守に貢献し、柔軟なポジショニングでチームのバランスを保ちます。

・フォワード（FW）：

右ウィング（RW）： フィル・フォーデン

スピードとドリブルで右サイドを突破し、得点やアシストを狙います。

センターフォワード（CF）： アーリング・ハーランド

強靭なフィジカルと決定力でゴールを量産し、相手ディフェンスに脅威を与えます。

左ウィング（LW）： ジャック・グリーリッシュ

巧みなボールコントロールと視野の広さで左サイドから攻撃を組み立て、チャンスを創出します。

■ 後半戦の展望

後半戦に向けて、マンチェスター・シティが再浮上するためには、以下の点が重要となります。

1. 主力選手の復帰とコンディション調整：ロドリやデ・ブライネなどの主力選手の早期復帰が期待されます。彼らの存在はチームの安定性と創造性を高める要素となります。

2. 戦術の再構築：グアルディオラ監督は、相手チームの対策に対応する柔軟な戦術を構築する必要があります。特に、マンマーク戦術への対策や守備の組織化が求められます。

3. 若手選手の台頭と新戦力の融合：高齢化が進む中、若手選手の積極的な起用と新戦力の早期適応が鍵となります。これによりチーム全体の活性化と競争力の向上が期待されます。

4. メンタル面の強化：連敗による士気の低下を防ぐため、メンタル面でのサポートやチーム内の結束力を高める施策が必要です。

5. フォーメーションの柔軟性：試合状況や相手チームに応じて、4-3-3 や 3-2-4-1 などのフォーメーションを柔軟に使い分けることが重要です。これにより、攻守のバランスを最適化し、試合展開に応じた戦術を実行できます。

6. チャンピオンズリーグでの巻き返し：前半戦での不振を払拭するため、チャンピオンズリーグでの好成績が求められます。これにより、チームの士気向上と国内リーグでの勢いを取り戻すことが期待されます。

現在、マンチェスター・シティはプレミアリーグで 5 位に位置し、チャンピオンズリーグ出場権獲得に向けて厳しい戦いが続いています。 後半戦での巻き返しを図るためには、上記の課題を克服し、チーム全体のパフォーマンスを向上させることが不可欠です。

■ 後半戦の有力なフォーメーション：3-2-4-1

後半戦はチームの戦術的柔軟性を高めるため、3-2-4-1 のフォーメーションが有力視されています。このシステムはビルドアップ時の数的優位で中盤と前線の連携を強化することが可能です。

・ゴールキーパー（GK）：エデルソン

・ディフェンダー（DF）：

〇右センターバック（RCB）：カイル・ウォーカー

〇中央センターバック（CB）：ルベン・ディアス

〇左センターバック（LCB）：ジョシュコ・グヴァルディオル f

・ミッドフィルダー（MF）：

〇右インサイドハーフ（RDM）：リコ・ルイス

〇左インサイドハーフ（LDM）：ロドリ

〇右ウィングバック（RWB）：ベルナルド・シウバ

〇左ウィングバック（LWB）：フィル・フォーデン

〇右攻撃的ミッドフィルダー（RAM）：ケヴィン・デ・ブライネ

〇左攻撃的ミッドフィルダー（LAM）：ジャック・グリーリッシュ

・フォワード（FW）：

〇センターフォワード（CF)アーリング・ハーランド

3 バックがビルドアップの起点となり、ロドリとリコ・ルイスが中盤でのパス回しを安定させます。ウィングバックのベルナルド・シウバとフィル・フォーデンがサイドの高い位置を取り、攻撃的ミッドフィルダーのデ・ブライネとグリーリッシュが中央で創造性を発揮します。最前線のハーランドが得点源としての役割を果たすことが期待されます。

■ 各ポジションの役割詳細

・ゴールキーパー（GK）： エデルソン

最終ラインでゴールを守るだけでなく、優れたキック精度でビルドアップの起点となります。

・ディフェンダー（DF）：

右センターバック（RCB）： カイル・ウォーカー

スピードと対人能力を活かして右サイドの守備を担当し、攻撃時にはサイドの高い位置まで押し上げます。

中央センターバック（CB）： ルベン・ディアス

守備のリーダーとして組織を統率し、高いフィジカルと読みで相手の攻撃を阻止します。

左センターバック（LCB）： ジョシュコ・グヴァルディオル

左サイドの守備を担当し、攻撃時にはビルドアップに参加して中盤へのパス供給を行います。

・ミッドフィルダー（MF）：

右インサイドハーフ（RDM）：リコ・ルイス

中盤の右側でボールの配給と守備を担当し、攻撃時には前線へのサポートも行います。

左インサイドハーフ（LDM）：ロドリ

中盤の底で相手の攻撃を遮断し、攻撃の起点となるパスを供給します。

右ウィングバック（RWB）：ベルナルド・シウバ

右サイドを上下動し、攻守にわたりチームに貢献します。攻撃時にはクロスやカットインでチャンスを創出します。

左ウィングバック（LWB）：フィル・フォーデン

左サイドを広く使い、スピードとテクニックで相手守備陣を崩します。守備時には素早く戻り、ディフェンスにも貢献します。

右攻撃的ミッドフィルダー（RAM）：ケヴィン・デ・ブライネ

高い創造性と精度の高いパスで攻撃を組み立て、得点機会を演出します。

左攻撃的ミッドフィルダー（LAM）：ジャック・グリーリッシュ

巧みなボールコントロールと視野の広さで左サイドから攻撃を組み立て、チャンスを創出します。

・フォワード（FW）：

センターフォワード（CF）：アーリング・ハーランド

強靭なフィジカルと決定力でゴールを量産し、相手ディフェンスに脅威を与えます。

このフォーメーションでは、3 バックが守備の安定を図りつつ、ウィングバックが攻撃時に高い位置を取ることで、攻守のバランスを保ちながら柔軟な戦術を展開できます。

■ 総括

このように、マンチェスター・シティはシーズンの進行に合わせてフォーメーションを柔軟に変更し、戦術的な多様性を持たせています。これにより、相手チームに対する戦略的優位性を確保し、試合ごとに最適な戦術を採用することが可能となっています。

フォーメーションとタレントを駆使し必ず CL 圏内で着地し、今季はベスト 16 プレーオフで敗退した CL の屈辱を、来季こそは必ず果たして欲しいと願っています。

アーセナルFC　(プレミリーグ)

79回生　あはは

アーセナルといえば日本代表の冨安健洋が所属しており、クラブ自体は知っている方が多いと思う。今年でミケル・アルテタ体制は6年目を迎えることとなった。

【夏に加入した選手】

左サイドバックのリカルド・カラフィオーリ、中盤のミケル・メリーノをそれぞれボローニャ、レアルソシエダから獲得。さらに移籍期限最終日にはチェルシーからフォワードのラヒーム・スターリングがローン移籍で加入すると決まった。

①カラフィオーリ

カラフィオーリはアルテタが昨シーズンから獲得を熱望していたそうで、ユリエン・ティンベル、アレクサンドル・ジンチェンコ、冨安などとのポジション争いが期待された。現在(3月下旬)の時点では怪我をしており、復帰は４月中旬頃らしい。

②メリーノ

メリーノはレアルソシエダから獲得した選手。昨シーズンまでは久保建英とともにプレーしていた。移籍後初の練習日に肩を負傷してしまうという不運に見舞われた。

③スターリング

マンチェスターシティやチェルシーでプレーしてきた実績のあるフォワード。両ウイングにセンターフォワードと前線ならどこでもプレー可能。

【CBガブリエウ・マガリャンイスの得点力】

　第4節、トッテナムとのノースロンドンダービー。チームの攻撃の軸であったマルティン・ウーデゴールが代表戦で怪我をしたために欠場したものの、64分にガブリエウがコーナーキックから頭で叩き込み1-0で

勝利した。

　続いて、CL開幕戦を挟み行われた第5節マンチェスターシティとの一戦。開始早々アーリング・ハーランドに先制を許すも、カラフィオーリがチーム加入後リーグ戦初先発初ゴール、さらにガブリエウのトッテナム戦に続くコーナーキック弾で逆転に成功。しかし、前半アディショナルタイムにレアンドロ・トロサールが退場してしまい、最終的に後半アディショナルタイムに追いつかれて2-2のドローとなった。

　さらにFAカップでのマンチェスターユナイテッド戦でもゴール挙げたが、チームはPK戦の末に敗退。結局勝利に結びついていない部分はあるが、大事なところで点取れるのが強いし、ウィリアム・サリバとのコンビは間違いなく現代最強だろう。

【アーセナルは優勝できないのか】

アーセナルは2年連続リーグ戦2位という成績で終わっており、今シーズンも2位以下が濃厚（3月時点）である。今季特に酷いのが怪我、そして勝ち切れない試合が多いということだ。前線の怪我が多すぎて、本来は中盤のメリーノがセンターフォワードをしている。先日のチェルシーとの試合では、コーナーキックからメリーノが決めて1-0の勝利。ゲーム内容はさておき、この勝利のおかげでチャンピオンズリーグ（CL）の出場圏内の順位でシーズンを終えられそうだ。そして今シーズン最後であり、最高の見どころはCLだ。この記事を書いている3月下旬時点では、レアル・マドリードとの準々決勝を控えている。ここでCL優勝というビッグタイトル獲得を期待しよう。

【レアル・マドリードに勝つ】

ここでレアルとの試合に向けて、どうやったらアーセナルが勝てるのかを考えていく。レアルはCLで圧倒的な強さを誇っており、何回も優勝してきた強豪である。個の力に優れた選手ばかりのスター軍団で、レアルの攻撃陣を抑え込むのはかなり難しい。アーセナルは守備力が高いチームではあるものの攻撃力に難あり。しかしアーセナルは怪我中のWGブカヨ・サカが復帰できる可能性があり、そうなれば攻撃に厚みが出るだろう。強みのセットプレーを中心とした数少ないチャンスを決めきり、ブロックを敷くことで、キリアン・ムバッペやヴィニシウス・ジュニオールの縦への突破力を無効化できれば、アーセナルにも勝機はあるはずだ。

※文化祭の時にはすでに結果は出ている。

リヴァプールの現スカッド状況と今後

79回生　Tame Dai
79回生　LEGENDO

0.挨拶

こんにちは、リヴァプールサポーターのTame Daiです。

この記事では、現在のリヴァプールのスカッド状況を踏まえ、今夏の補強について考察していきたいと思います。

長くはなりますが、気になる部分だけでも読んでいただけますと幸いです。※この記事に書いてある情報は記事執筆時点(2025年3月末時点)のものです。

1.はじめに

補強について考える前に、今このクラブにふさわしい選手とは？について考えなければなりません。

まず前提ですが、このクラブにはお金がありません。しかし、情熱的なサポーターとホームスタジアムがあります。そのため、的確な値段で選手を購入し、長い在籍期間を過ごしてもらう傾向にあります。また、ピッチ内外で情熱的であることが求められるでしょう。さらに、試合数増加に対応するべく根本的な選手数を増やす必要もあります。

以下の記事では、僕の独断ではありますが、この基準のもと評価したいと思います。

2.GK(ゴールキーパー)

GKは、数年前からは考えられないほど充実しています。

絶対的守護神のアリソン、世界最高の2ndキーパーであるケレハーと正に鉄壁です。

ケレハーについては再三の移籍リクエスト、契約状況を鑑みるに今夏の移籍は確実となっています。

しかし、ママルダシュビリが来夏加わることは決定しており、量.質ともに不安はないでしょう。

○ギオルギ=ママルダシュビリ(Giorgi Mamardashvili)・バレンシア(スペイン)

国籍：ジョージア

ポジション：GK

年齢：24歳

市場価値：3000万ユーロ

一時期、GK中市場価値世界一位でもあったジョージア人。

2m近い身長を生かした広範囲のセービングが魅力的です。

昨夏にリヴァプールに移籍し、現在は期限付き移籍という形でバレンシアに在籍しています。

今季はチームの不調もあり彼の実力も疑問視されていますが、まだ若く、将来的な守護神候補として期待できます。

3.DF(ディフェンダー)

ディフェンス陣は、1番動きが激しいポジションとなるでしょう。

CBではファンダイクの契約延長は未だ決まっていませんし、今季のクオンザーの不調を見るに、ダイク.コナテの控えを安心して任せられる選手が不可欠です。(個人的にはクオンザーが頼もしいCBになってくれることが1番ですが...)

SBに目を移すと、レアル移籍が確実視されているアーノルド(相当悲しいです)、衰えが顕著になってきたロバートソン(こちらも相当悲しいです)というクロップ政権を支えた超攻撃的両SBの時代が終わりを迎えようとしています。

控えを見ても量.質ともに不足しており、特に左SBについては今夏補強の最優先事項といえ、大金を払うことを厭わないでしょう。

○ジェレミー=フリンポン(Jeremie Frimpong)・レヴァークーゼン(ドイツ)

国籍：オランダ

ポジション：右SB.WB

年齢：24歳

市場価値：5000万ユーロ

アーノルドが退団すれば、絶対的であった右SBのポジションが空くことになります。ブラッドリーにも才能はありますが、シーズンを通して活躍するにはまだ早いでしょう。

そんな中、即戦力右SBとして最適とも言われているのが、シャビアロンソ監督の元で無敗優勝も経験した、オランダ人DFです。しかも彼、シティユース出身なので実はHG枠(※)なんですね。

ピッチを縦横無尽に駆け回ってのクロスやシュートが多く、攻撃参加の形はアーノルドと大きく異なります。しかし、得点関与数が非常に多く、毎年二桁に迫るゴールやアシストを記録しています。また、絶えずスプリントを繰り返すプレースタイルもチームにマッチするでしょう。

守備面での不安はやや残りますが、そういった点でもアーノルドの面影を感じられるはずです(笑)

※HG枠：イングランドで若い選手が育ちやすくなるために、登録選手のうち、自国リーグで育った選手の数が定められている規定。

○ニコ=シュロッターベック(Nico Schlotterbeck)・ドルトムント(ドイツ)

国籍：ドイツ

ポジション：CB

年齢：25歳

市場価値：4100万ユーロ

ファンダイクが退団した場合(そんなことはあり得ないはずだが)、新たな経験豊富なディフェンダーが必要になります。

彼は25歳191cmの左利きのセンターバックです。左利きのセンターバックは貴重です。現在ドルトムントで活躍しており、ドイツ代表でも試合に出ています。191cmと慎重の高さを活かした空中戦の強さと、1対1の対応に優れています。ビルドアップ時は、高精度の左足から繰り出される長短のパスで、攻撃の起点となることができます。特に、スペースがある際にはドリブルでボールを前線へ運ぶ積極性も持ち合わせています。今シーズンは4アシストも記録しています。

○ミロシュ=ケルケズ(Milos Kerkez)・ボーンマス(イングランド)

国籍：ハンガリー

ポジション：左SB

年齢：21歳

市場価値：2800万ユーロ

ハンガリー代表を牽引する2人がリヴァプールで躍動するのもそう遠い未来の話ではないのかもしれません。

今夏の補強は絶対条件とも言われる左SBのポジションでトップターゲットとなっているのが、このボーンマスの若手左SB。移籍金は4000万にも上るそうですが、年齢も考慮すると決して払えない額ではありません。

スピードとスタミナがあり、球際の強さが魅力的です。推進力あるドリブル、今季ここまでリーグ戦5アシストというアシスト能力にも期待です。また、これは主観ですが血気盛んなタフガイという印象が強いので、その点でもロボの後継者に相応しいかもしれません。

マンチェスターUも興味を示しているとの噂もありますが、ソボスライのいるこちらの方が獲得レースは一歩先行しているはずです。(ちなみに彼と彼の家族はマンUファンだそう涙)

○ラヤン=アイト-ヌーリ(Rayan Aït-Nouri)・ウルブス(イングランド)

国籍：アルジェリア

ポジション：左SB.WB

年齢：23歳

市場価値：3500万ユーロ

ケルケズ獲得に失敗した場合、ターゲットになってくるのは、サラーと似た風貌を持つこの23歳でしょう。

ウルブスでは主にWBの位置で出場し、柔らかなタッチを使ったドリブルや順足アタッカーながら中に切り込むこともできるカットイン、精度の高いクロスなど、高い攻撃性能が持ち味です。また、今季でプレミア5シーズン目ということもあり球際の強さも魅力的です。

すでにマンチェスターCやチェルシーなどからも関心が寄せられているアイト-ヌーリですが、現契約は来夏までで、年齢的にも今夏が獲得の大きなチャンスとなります。

○その他の補強候補

ディーン=ハイセン(Dean Huijsen)(ボーンマス、19歳スペイン代表CB)

マルク=グエイ(Marc Guéhi)(クリスタルパレス、24歳イングランド代表CB)

ヨレル=ハト(Jorrel Hato)(アヤックス、19歳オランダ人左SB.CB)

オラ=アイナ(Ola Aina)(フォレスト、28歳ナイジェリア代表右SB、左SB)

ミゲル=グティエレス(Miguel Gutiérrez)(ジローナ、23歳スペイン人左SB)

アントニー=ロビンソン(Antonee Robinson)(フラム、27歳アメリカ代表左SB)

4.MF(ミッドフィールダー)

2年前に獲得した4人とアカデミー出身の若き才能が共闘する中盤は、テクニカルな上運動量も豊富で、比較的充実していると言えます。

しかし、課題もあります。フラーフェンベルフ、マクアリスター、ソボスライの3人から大きくメンバーが変わることはなく、彼らの疲労が後半戦のチームの失速の一因と言われています。

よって、中盤に関しては単に今いる選手の代わりとなれる選手が求められます。

その点で言えば、昨季を怪我で棒に振ったバイチェティッチが今季はレンタル先でシーズンを完走し、来季はリヴァプールで過ごす可能性が高いことは好材料となります。

スロットが中盤に求めているものは明確です。

1つは90分プレーしてもなお強度を落とさずハードワークができる献身性、そしてこれは特に守備的MFについてですが、高度なプレス回避能力、そしてパスセンスです。

このような理想的な中盤は市場に少ないですが、レギュラークラスは揃っていることを考えるとこれからの成長も見込める若者を適切な価格で買い取ることが予想されます。

○サムエレ=リッチ(Samuele Ricci)・トリノ(イタリア)

国籍：イタリア

年齢：23歳

ポジション：守備的MF

市場価値：3000万ユーロ

23歳にしてイタリア代表に名を連ねるこのレジスタは、単なる守備的な中盤に留まらない能力を持っています。

アグレッシブに体を当てにいくタフさ、豊富な運動量、前に運べるドリブル、広い視野から繰り出される多彩なパス、そして10番の選手かのようなゴールセンス、どれをとっても一流の、まさに万能型の中盤です。

トリノの要求額は3000万ユーロほどと比較的安く、他にもマンチェスターCやACミランなどからの興味も報じられています。

○ラヤン=シェルキ(Rayan Cherki)・リヨン(フランス)

国籍：フランス

年齢：21歳

ポジション：トップ下、WG

市場価値：3500万ユーロ

アルジェリアにもルーツを持つこの21歳は、リヨンで2019年にデビュー後、クラブの最年少得点記録を更新するなど順調に成長を遂げています。

両足を使ったドリブルが可能で、ファンタジスタみが感じられます。また、アシスト能力に長けていて今季ここまでで、全公式戦で19アシストを記録しています。

中央や左のサイドでもプレーできますが、リヨンでは主に右サイドで起用されています。サラーがいなくなった時、右サイドでの活躍も期待できます。

リヨンは財政状況が悪く、これが改善されない場合は来シーズンの2部降格や補強禁止などの処分が下されます。この状況を解決するために、シェルキは売却候補となっています。3000万ユーロの要求がなされていますが、それより低いオファーでも応じる可能性はあるようです。いずれにしてもこのような若い才能を獲得するにはかなり安い金額となります。

○オルクン=キョクチュ(Orkun Kökçü)・ベンフィカ(ポルトガル)

国籍：トルコ

年齢：24歳

ポジション：インサイドハーフ

市場価値：2800万ユーロ

24歳175cmの攻撃的ミッドフィルダーです。現在、ポルトガルリーグのベンフィカに所属しています。キョクチュは、攻撃的ミッドフィールダー（CMF）としてプレーメイカーの役割を担い、低めの位置から攻撃の起点となるプレースタイルが特徴です。彼のゲームビジョンとパス精度は高く評価されており、チームの攻撃を組み立てる中心的存在です。トルコ代表としても活躍しており、EUROにも出場しています。突出した能力はないですが、何でもできるミッドフィルダーでいい選手だといつも思います。

○その他の補強候補

マルティン=スビメンディ(Martín Zubimendi)(ソシエダ、26歳スペイン代表MF)

ベニャト=トゥリエンテス(Beñat Turrientes)(ソシエダ、22歳スペイン人MF)

ニコロ=ロベッラ(Nicolò Rovella)(ラツィオ、23歳イタリア代表MF)

カルロス=バレバ(Carlos Baleba)(ブライトン、21歳カメルーン代表MF)

アンジェロ=シュティラー(Angelo Stiller)(シュツットガルト、23歳ドイツ代表MF)

5.FW(フォワード)

リヴァプールといえば、やはり前線の選手の個の力と、彼らの織りなす芸術的なカウンターアタックです。また、アタッカーだとしても(たとえサラーでさえ)、守備をサボらず上手なプレスが要求されるという点も、このチームの特徴といえます。

前線の選手の入れ替わりは一番読みづらいです。まず、サラーの契約延長は未だに決まっていません。サポーターとしてはなんとしてでも残ってほしいですが、この時期になってくると少し歯痒いです。他にも、今シーズン不調のヌニェスやキエーザ、ジョタやディアスまでも放出の可能性が報じられており、いずれの選手も適切なオファーが来れば、売却を躊躇わないでしょう。

そんな中でも、確かに必要なのはやはり9番ポジション、ストライカーです。今季は主にディアスやジョタといった本職WGの選手が中心に起用されていますが、フィニッシュ面ではサラーへの依存が目立ちます。他にもサラーの後釜となる存在やディアス等放出の場合の新たなWGも必須になります。

アタッカーは比較的額も大きくなるので、しっかり補強候補を見極め適切な買い物をしたいものです。

○アンソニー=ゴードン(Anthony Gordon)・ニューカッスル(イングランド)

国籍：イングランド

年齢：24歳

ポジション：WG

市場価値：6500万ユーロ

生まれも育ちもリヴァプールの彼は、幼少期にリヴァプールのセレクションに落ちてエヴァートンの下部組織で育ちました。しかし、今でも心はリヴァプールにあるそうで移籍の話も度々噂されています。

そんな真の"スカウサー"(リヴァプール人の意味)の彼は、今季もここまで9ゴール6アシストと抜群の活躍を見せています。左右どちらでもプレーでき、両足を使った多様な打開が可能です。

要求額は6000万ユーロほどと言われていますが、最近ニューカッスルと長期契約を結んだこともあり実現の可能性は低そうです。余談ですが、彼みたいなタイプのイケメン、憧れます。

○アレクサンダー=イサク(Alexandar Isak)・ニューカッスル(イングランド)

国籍：スウェーデン

年齢：25歳

ポジション：ストライカー

市場価値：1億ユーロ

今やプレミア、いや全世界のビッグクラブのターゲットとなっている"イブラ2世"ですが、リヴァプールもそんな彼に関心を寄せるクラブの一つです。

デカい、強い、速い、それだけではありません。卓越したボールコントロール、そして何よりも、とんでもない決定力を持っています。ボックス内ならもちろん、ボックス外からでも簡単にえげつないコースに決めてきます。イサクを獲得することの1番の利点は彼と対峙する必要がなくなることかもしれません。

お値段はもちろんお高く、1.5億ユーロほどの値段がつけられています。一部では、ゴメスやクオンザーを含めた大型トレードの可能性も報道されていますが、移籍が実現すれば間違

いなく前線の大幅強化となります。ライバルはアーセナルや契約延長を目指すニューカッスルなどがあり、状況はそれらのチームのCL出場権などにも左右されるでしょう。

○ジョナサン=デイヴィッド(Jonathan David)・リール(フランス)

国籍：カナダ

年齢：25歳

ポジション：ストライカー

市場価値：4500万ユーロ

今夏フリーとなるこのカナダ人ストライカーも、欧州各ビッグクラブの注目の的となっています。僕自身、彼のプレーを多く見たことはありませんが、長い手足を活かして両足を使った多彩なゴールを決める、という印象があります。

移籍金なしで獲得できるのは大変魅力的ですが、アーセナル、ユナイテッド、チェルシーといったプレミア勢だけでなく、バルサ、インテル、ユーベといった様々なクラブとの争奪戦が予想されます。しかし、本人の希望はラリーガだそうです涙。

○モハメド=クドゥス(Mohammed Kudus)・ウェストハム(イングランド)

国籍：ガーナ

年齢：24歳

ポジション：WG

市場価値：5000万ユーロ

24歳のウエストハム所属のウイング、トップ下、トップなど様々なポジションができる選手です。卓越したテクニックと空間認識力を持ち、小さなスペースでも高いボールコントロールと低い重心を活かしたプレーができます。これにより、プレッシャー下でもボールを失わず、攻撃の起点となることができます。また、ドリブルがとてもうまく、デンマークリーグ時代には1試合平均5.31回のドリブル成功を記録したといいます。昨シーズンは8ゴールを記録しており、大活躍でした。

○ブライアン=エンベウモ(Bryan Mbeumo)・ブレントフォード(イングランド)

国籍：カメルーン

年齢：25歳

ポジション：右WG

市場価値：5000万ユーロ

またまたサラーと同じアフリカ人の紹介です。細目で見たらサラーに見えるかもしれませんが、ヒゲの量はサラーの倍はあります。

ゴールを決め切る力、アシスト能力ともに優れており、今季は自身初のプレミア二桁ゴールを達成しています。また、卓越したスピードや体の強さがあり、カウンターの起点となったり前線での収め役になったりと、イメージだけでなく各種スタッツを見てもサラーと似ているなと感じます。

現契約は来夏までで、移籍金としては5000万ユーロほどが求められています。ニューカッスルやユナイテッドからの関心も伝えられており、さまざまな面を考慮してもサラーの退団がなければ実現しなさそうです。

○その他の補強候補

レロイ=ザネ(Leroy Sané)(29歳ドイツ代表WG)(今夏契約満了のためフリー獲得可)

久保建英(ソシエダ、23歳日本代表右WG)

コンスタンティノス=カレツァス(Konstantinos Karetsas)(ヘンク、17歳ギリシャ代表WG)

アントワーヌ=セメンヨ(Antoine Semenyo)(ボーンマス、25歳ガーナ代表WG)

マテウス=クーニャ(Mateus Cunha)(ウルブス、25歳ブラジル代表左WG、MF、FW)

ジョアン=ペドロ(João Pedro)(ブライトン、23歳ブラジル代表センターフォワード)

6.まとめ

長くはなりましたが、ここまで読んでいただきありがとうございました。僕もここまで書くのがすごく楽しかったです。

改めて、今夏の退団候補とそれを踏まえた補強すべきポジションの優先順位を簡潔にまとめたいと思います。

○退団・放出候補

・クィービン=ケレハー(Caoimhín Kelleher)

・ビテスラフ=ヤロシュ(Vítězslav Jaroš)(今夏契約満了)

・アンドリュー=ロバートソン(Andrew Robertson)

・コスタス=ツィミカス(Kostas Tsimikas)

・トレント=アレクサンダー-アーノルド(Trent Alexander-Arnold)(今夏契約満了)

・フィルジル=ファン=ダイク(Virgil van Dijk)(今夏契約満了)

・ジョー=ゴメス(Joe Gomez)(移籍可能性：中)

・ジャレル=クアンサー(Jarell Quansah)(移籍可能性：中)

・遠藤航(移籍可能性：中)

・ハーヴィー=エリオット(Harvey Elliott)(移籍可能性：中)

・ルイス=ディアス(Luis Díaz)(移籍可能性：中)

・ダーウィン=ヌニェス(Darwin Núñez)

・フェデリコ=キエーザ(Federico Chiesa)

・ディオゴ=ジョタ(Diogo Jota)(移籍可能性：中)

・モハメド=サラー(Mohamed Salah)(今夏契約満了)

ロバートソンとツィミカスはどちらか一方が確実に放出されるでしょう。"移籍可能性：中"は適切なオファーや補強の上での交渉材料となるならば放出の可能性がある、と捉えてください。

○補強優先順位

1.左SB

2.ストライカー

3.センターバック

4.サラーの後釜

5.右SB

6.中盤、その他アタッカー

左SBとストライカーには大きな補強を期待したいです。アーノルドの後釜となる即戦力右SBは、ブラッドリーやゴメスの存在もあり、ある程度のカバーが可能なことを考えてこの順位となっています。

7.おわりに

“We have to change from doubters to believers."「私たちは『疑う者』から『信じる者』へ変わらなければならない。」————就任後初の記者会見でユルゲン・クロップはサポーターに向けてこう言いました。それから約10年、24/25シーズンのリヴァプールは、これまでにない激動のシーズンを迎えています。

9シーズン近い在任期間で古豪から強豪へ、そして"疑う者から信じる者へ"とチームを変えたユルゲン・クロップが去り、新たに就任したオランダ人監督の元、クラブは次のステップへと踏み出そうとしています。しかし、夏の補強は実質フェデリコ・キエーザの1人のみ。

そんな期待と不安を胸に迎えた今シーズンはPL首位、CLもグループリーグ首位突破という"超"上振れの前半戦を過ごしました。

冬の補強も一切なく迎えた後半戦。いよいよ"四冠"という言葉も聞こえるほどになったのも束の間、2月にはFA杯敗退、3月にはCLパリ戦のアンフィールドでの衝撃的な敗戦、カラバオ杯決勝でもニューカッスルに力負け、立て続けにタイトルを失うこととなりました。

苦難はそれだけでありません。未だに決まらないサラー、ファンダイク、アーノルドとの契約延長、特にアーノルドに関してはレアル・マドリードへのフリー移籍が確実となる報道もなされました。

ただ、僕は現状を楽観視しています。監督就任初年度でのPL優勝。それだけでもクロップ、ペップですら達成していません。(まだ確定ではありませんが、文化祭ごろには優勝が確定していることを願っています。)また、ピッチ外を見てもしばらく補強をしてない上に主力選手の退団、今夏の補強予算は2億ユーロに上るとも言われています。

爆発力のある現スカッド、新進気鋭の名将に今夏の補強が加わった来シーズンのリヴァプールが、さらなる躍進を遂げることを願っています。

リヴァプールの3トップの歴史と戦術

79回生　LEGENDO

１.はじめに

プレミアリーグで今シーズントップを走り続けているチームはどこか、それはリヴァプールだ。ユルゲンクロップ監督が前シーズンで退任し、今年からアルネスロット監督が新監督として任された。当初は、世界的に有名であるクロップの後を引き継ぐのは難しく、今シーズンはよい成績を残すことができないだろうと予想されていたが、その予想に反して順調に勝ち続けプレミアリーグ優勝はほぼ確実と言っていいだろう。では今年のなぜリヴァプールは強いのか。それはエースサラーの完全復活が非常に大きい。これまでゴール数アシスト数プレミアリーグ1位であり、ほぼすべての試合でゴールかアシストのどちらかに絡んでいる。これはすばらしいことである。

リヴァプールのフォーメーションは昔から433ベースであり、攻撃においては前の三枚がとても重要となってくる。ではここからリヴァプールにサラーが来てからの前線の三枚を詳しく見ていこうと思う。

２.これまでの３トップの戦績

これからサラーが加入した2017/2018シーズンからの3トップの戦績を見ていく。

(0ゴール0アシストの前線の選手は省く)

（例）ダルウィンヌニェスが30ゴール25アシストの場合、下のように表記する

ダルウィンヌニェス　30/25

①　2017/2018シーズン　4位　21勝12分5敗　　84得点

モハメド　サラー	32/10
サディオ　マネ	10/7
ロベルト　フィルミーノ	15/7
ダニエル　スタレッジ	2/1
ドミニク　ソランケ	1/1
ダニー　イングス	1/0

②　2018/2019シーズン　2位　30勝7分1敗　　89得点

モハメド　サラー	22/8
サディオ　マネ	22/1
ロベルト　フィルミーノ	12/6
ディヴォック　オリギ	3/1

ダニエル　スタレッジ　　2/1
ジェルダン　シャキリ　　6/3

③ 2019/2020シーズン　1位　32勝3分3敗　　85得点
モハメド　サラー　　19/10
サディオ　マネ　　18/7
ロベルト　フィルミーノ　9/8
ディヴォック　オリギ　　4/1
ジェルダン　シャキリ　　1/1

④　2020/2021シーズン　3位　20勝9分9敗　　68得点
モハメド　サラー　　22/5
サディオ　マネ　　11/7
ロベルト　フィルミーノ　9/7
ディオゴ　ジョタ　　9/0
ジェルダン　シャキリ　　0/2

⑤　2021/2022シーズン　2位　28勝8分2敗　　94得点
モハメド　サラー　　23/13
サディオ　マネ　　16/2
ロベルト　フィルミーノ　5/4
ディオゴ　ジョタ　　15/4
ルイス　ディアス　　4/3
ディヴォック　オリギ　　3/0
南野　拓実　　3/0

⑥　2022/2023シーズン　5位　19勝10分9敗　　75得点
モハメド　サラー　　19/12
ロベルト　フィルミーノ　11/4
ディオゴ　ジョタ　　7/4
ダルウィン　ヌニェス　　9/3
コーディ　ガクポ　　7/2
ルイス　ディアス　　4/2

⑦ 2023/2024シーズン　3位　24勝10分4敗　　86得点

モハメド　サラー	18/10
ディオゴ　ジョタ	10/3
ダルウィン　ヌニェス	11/8
コーディ　ガクポ	8/5
ルイス　ディアス	8/5

⑧ 2024/2025シーズン　1位　21勝7分1敗　　69得点(3/31時点)

モハメド　サラー	27/17
ディオゴ　ジョタ	5/3
ダルウィン　ヌニェス	5/2
コーディ　ガクポ	8/3
ルイス　ディアス	9/4

このようにまとめることができた。

上のデータを見てもわかるように、ゴールもアシストもサラーが異常に多いことがわかるだろう。サラーは昔よりアシスト数が多くなっているとも言える。

また、昔はマネもサラーと並ぶくらいのゴール、アシスト数を記録している。マネはサイドから中へのドリブルが非常に上手かった印象がある。2人のウイングの得点能力が高すぎるが、昔のリヴァプールのストライカーであるフィルミーノ、そして　ジョタも毎シーズン10点くらいを記録している。マネが退団してからの左ウイングはディアスとガクポであり、それぞれ半分くらいずつで出場している。そのため、二人とも同じくらいの結果になっている。

その他にも上のデータから様々なことがわかると思う。

３.クロップが監督時のリヴァプールの戦術

　現在のリヴァプールの強さをもたらしたのは誰か、それはユルゲンクロップだろう。2015年からリヴァプールを率いた彼は、リヴァプールで新たなカウンター戦術「ゲーゲンプレス」を生み出した。「ゲーゲンプレス」とは、次のようなものである。

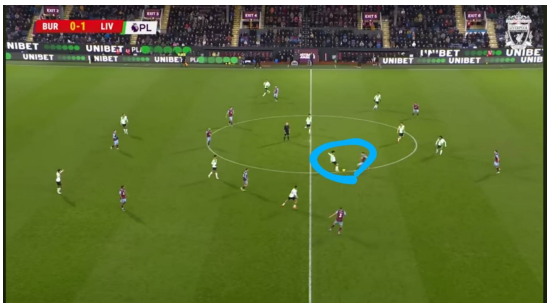
- 敵陣地でのボール奪取を目的とする。
- 相手が守備を整える前にボールを奪うことで、そのままゴールに向かっていく。
- チーム内の正確な連携が求められる。
- 前からプレスに行くため、スタミナが必要な戦術

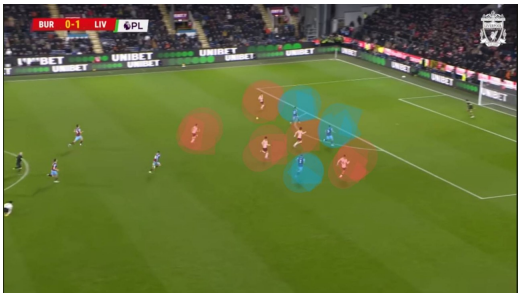
ここで皆さんはこう思うだろう。ゲーゲンプレスとハイプレスは同じなのではないか？しかし、両者は完全に異なるものである。

ゲーゲンプレスは、ボールを奪われることを前提としたうえで、奪われた後のプレッシャーの掛け方を戦術に落とし込まれている。ただ前から奪いに行くハイプレスとは異なっている。

ゲーゲンプレスの「ゲーゲン」とは「反対」「対立」といった意味を持つドイツ語であるため、ゲーゲンプレスは相手がかけてくるプレスに対応するための「対プレス」だと考えられる。

　クロップの時代の戦術は、このゲーゲンプレスがベースであったがポゼッションも行っていた。クロップ時代のポゼッション時は、今年のスロットに比べると選手の立ち位置は比較的自由にしていた。リヴァプールのサイドバックのアーノルドとロバートソンはクロスの上手いため、クロスからの得点も多かった。2019/2020シーズンには二人とも2桁アシストを残している。また、ボールを持ってからゴールに迫るまでのスピードも速かった。では少しクロップの時代の試合を見ていく。





これは2023/2024シーズンのバーンリーとの試合である。

ゲーゲンプレスにより、左の写真の青丸の選手が高い位置でボールを奪い、そのまま攻撃に転じる状態だ。

そのまますぐゴールに向かうことで、リヴァプール5人、バーンリー3人とゴール前で数的優位を作ることができる。ここまでくれば、あとは決めるだけだといっていいだろう。

このようにゲーゲンプレスによって得点を奪った試合がたくさんある。

４.今季のリヴァプールの強さとは

　この章では、今期のリヴァプールがなぜ強いのかを見ていく。

⑴怪我の少なさ

　一番大きな要因はけが人の少なさだろう。マンチェスターシティはロドリが今季絶望、アーセナルもサカが長期離脱している中、リヴァプールの怪我人の情報はほぼ耳にしない。なぜなのだろうか。

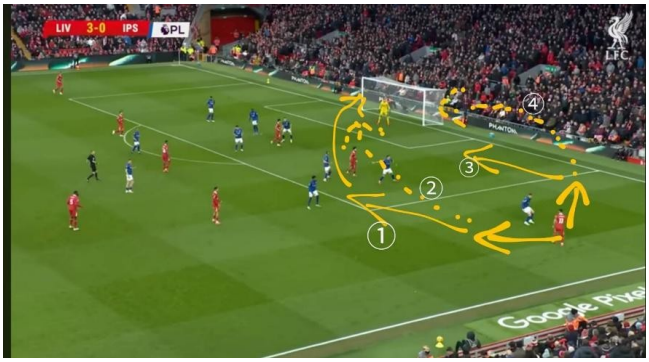
　ここで、今季のプレミアリーグで選手の走行距離の合計を確認すると、リヴァプールが一番少ない。これはスロットが選手一人一人の立ち位置を指示し、フィールドをうまく使えているからと言える。これにより、選手一人一人の負担が軽くなり、疲労が残りにくく、怪我もしにくくなったと考えられる。

⑵サラーの完全復活

　　上のデータを見ると分かるように、今季のサラーのゴールアシスト数は29試合しか行っていない状態で、少し前のサラーのシーズンでのゴールアシスト数を超えている。しかもサラーはウイングの選手であり、トップの選手よりはゴールがとりにくいと言えるだろう。

では、サラーがボールを持った時のサラーの攻撃パターンを見ていく。

右の図の①～④までの番号はサラーがここから行うであろうアクションである。この他にも一度ボールを戻す、中盤の選手にパスするなどがあげられるがここではこの4つのアクションに絞って考えてみる。



(今シーズンのイプスウィッチ戦)

①・・・これはサラーが中に切り込みそのままシュートを打ちに行く場合だ。ここで重要なのはサラーがシュートを打つために周りの選手が連動してシュートコースを開けることだ。その選手のオフザボールの動きによって相手のディフェンスを崩すことができる。

②・・・これは一つずらしてふわりとしたクロスボールを入れる場合だ。今季はこのパターンでサラーのアシストが多くなっている気がする。また、この場合に右ウイングの選手が奥に立ち位置をとることで奥があき、決まる場合も多い。

③・・・縦に運んでそのままえぐってシュートもしくはパスをする場合だ。中まで侵入することができれば、高確率で点が取れるだろう。しかし、サラーは左利きのため、相手とボールの位置が近くなってしまうともいえる。

④・・・少しずらして左足のアウトサイドでクロスを入れる場合だ。この場合相手からするとタイミングがわかりにくいため、防ぐことができない。またクロスも人に向かう回転であるため、合わせやすいだろう。昔はこのパターンは少なかったが、今季は多い気がする。

このように昔よりサラーの攻撃の選択肢が広がったことで、ゴール関与数が爆増したと考えられる。

(3)今シーズンの大まかな戦術

今年のリヴァプールはポゼッションとカウンターを融合した戦術をとっている。

それぞれ詳しく見ていこうと思う。

【ポゼッション】

ビルドアップ時、リヴァプールはアーノルドの立ち位置によっておおきく二つに分かれる。

まず1つ目は、昔と同じように普通に右サイドにポジションをとることだ。この場合は少しサイドバックが高い位置をとった433の形でビルドアップをはじめ、アーノルドはサイドに張ってクロスを供給するという形だ。

そして、もう1つが偽サイドバックという形だ。これはよりビルドアップをしやすくするためにサイドバックが中に入ってきてビルドアップを行うというものだ。リヴァプールはアーノルドを中に入れる。この場合、左サイドバックのロバートソンが高い位置をとり、253でビルドアップを行ったり、ロバートソンが少し落ちて343で行ったりと流動的になる。

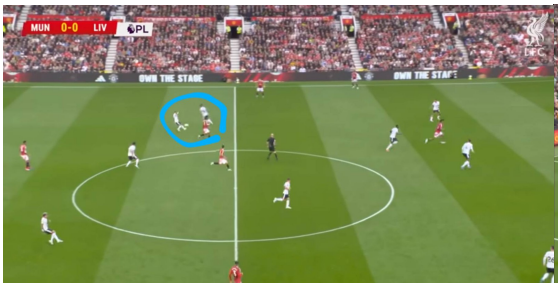
実際の試合を見てみよう。

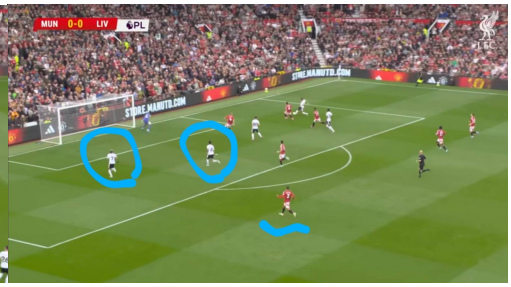
右の図の黄色で囲った選手がアーノルドである。このように中に入ることで、中盤で数的優位を作りやすかったり、相手の守備を中に引き付けることでサイドのスペースを開けてサイド攻撃をしやすくしたりするなど様々な効果がある。この戦術をリヴァプールは前シーズンくらいから取り入れはじめた。(今シーズンのマンチェスターシティ戦)

【カウンター】

カウンターにも２種類あり、ロングカウンターとショートカウンターに分けられる。

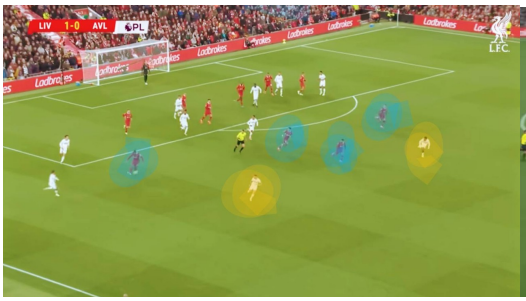
それぞれ実際の試合を例にとって考えてみる。





この写真を見てほしい。(今シーズンのマンチェスターユナイテッド戦)

左の写真の高い位置でボールを奪った瞬間に、守備から攻撃に切り替えることで、右の図のように相手に追いつかれず点を取ることができる。これがショートカウンターである。さっき説明したゲーゲンプレスによってショートカウンターを行うことができる。



(今シーズンのアストンヴィラ戦)

次にこの写真は相手のコーナーキックからのロングカウンターだ。左の写真からわかるとおり、相手のコーナーキックをはじいた後すぐ相手が反応するよりも先にリヴァプールの選手が前に走り、すでに数的優位の状況を作れている。そして右の写真のように逆サイドが開くことで点が決まる確率が上がる。

５.来シーズン活躍してほしい前線の選手

①コーディ　ガクポ

今季は左ウイングでの出場が多く、センターフォワードの時より生き生きしている印象。カットインからのシュートが強烈で誰に求めることはできないだろう。193cmと図体がでかいのに俊敏である。もっとたくさんシュートを打ってほしい。

②フェデリコ　キエーザ

まず怪我をするのをやめましょう。試合に出ないと意味がない。リヴァプールにきて半年ほど怪我でほぼ試合に出ていなかった。実績はある選手だけにもったいないと思う。移籍金20億と比較的安いが、それでも試合に出られない選手を手元において置く必要はないのではないか。と悪口はここまでにして、実はめちゃめちゃ足が速い。現在のリヴァプールの中では一番だと言われている。そして両足使うことができるため、けが人が出た時の穴も埋めてくれる。また、カラバオ決勝では素晴らしい抜け出しからゴールを奪った。まだ一年目だから気長に待っていようと思う。

③ディオゴ　ジョタ

この選手も怪我が多く、長い時ではシーズンの半分くらいを怪我で過ごしている。2021/2022シーズンの輝きを取り戻してほしい。この選手はオフザボールの動きがとても上手く、シュートも非常に上手い。また、高身長というわけではないのにヘディングが強く、ノッティンガム戦では出場してすぐヘディングで決めた。今季はあまりスロットに使われておらず、移籍の噂も出ているが、個人的には残留してほしい。

６.最後に

ここまでリヴァプールについていろいろなことを話してきたが、とりあえず今季はリーグ優勝をし、来季からチャンピオンズリーグなどでもタイトルを獲ってほしい。来シーズンに誰が加入するかはまだ分かっていないが、良い方向に進むと信じている。これからのリヴァプールの選手たちの活躍が楽しみだ。

トッテナム・ホットスパー紹介

79回生　ぽすてこ

1.今シーズンの出来

(この記事を書いている３月26日時点)

・プレミアリーグ１４位

・ヨーロッパリーグ準々決勝進出

・カラバオカップ準決勝敗退

ポステコグルー2年目である今シーズンはこのような状況で特にリーグ戦は29戦10勝4分け15敗と不調に苦しんでいる。しかしまだヨーロッパリーグは勝ち残っているので優勝を目指して頑張っていきたい

２.不調の要因

　不調の大きな要因はまず守備陣の怪我の多さである。これは監督のポステコグルーのハイラインで積極的にプレスをかける戦術によるものである。高い位置までプレスをかけに行くサイドバックや特にプレスに行ったサイドバックの裏やハイラインの裏を守るセンターバックは特にこの被害を受けており、スカッド的にも厳しいシーズンになった。他の要因としては主力選手がいないときの得点の少なさであり。選手の質に頼った攻撃が多く、なかなか点が入らないもどかしい試合をたくさん見てきた。

３.主な移籍選手紹介

FW

ドミニクソランケ…ボーンマスから約100億で加入。空中戦や周りを生かすポストプレーなどなんでもできる点取り屋、スパーズに移籍してからは守備でも貢献度も高い。また日本のアニメが大好き。

ティモヴェルナー…ライプツィヒから加入。俊足を生かしたドリブルが持ち味だが、なかなか得点に絡めておらず、怪我もありベンチ要因になりつつある。

マチステル…バイエルンからレンタルで加入。これからに期待。

ウィルソンオードベール…バーンリーから加入。身体能力が高く左サイドでの仕掛け

は期待感がある。あとは得点力とクロス精度を高めてほしい。

MF

アーチーグレイ…リーズユナイテッドから加入。攻守万能な中盤、怪我人が続出した時にはセンターバックとしても試合に出ていた。

DF

ケヴィンダンソ…フランスのRCランスから加入。フィジカルとスピード両方を備えたスパーズのハイラインにまさにぴったりの選手。安定感さえあればレギュラーで戦っていける。

GK

アントニーキンスキー…スラヴィアプラハから加入。カップ戦などに出場し安定したセーブを披露、これからに期待。

今年の移籍は個人的にかなり良かったと思う。やはりソランケは得点はもの足りないがチームへの貢献は抜群でポテンシャルを感じるプレーも多くあったので、来シーズンは得点のところで輝きを見せてほしい。

他にも、アーチーグレイやキンスキーやダンソなど若くて有望な選手を獲得できたのでこれからのシーズンに期待出来移籍だと思う。

４.来シーズン楽しみな選手

スパーズが来シーズン上位に復帰するために僕が個人的にカギとなる選手を３人紹介します。

GKヴィカーリオ

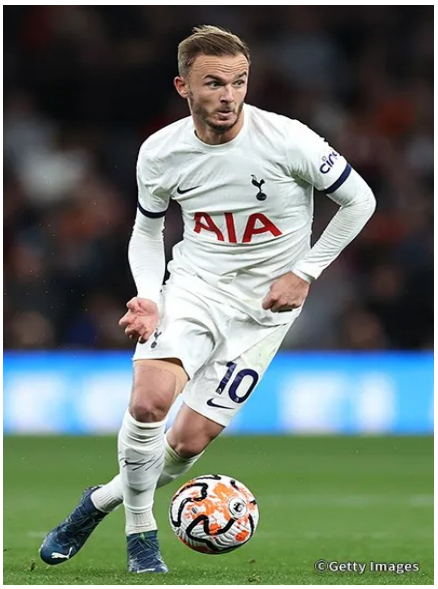
　昨シーズンに加入したスパーズの守護神。今シーズンは怪我に悩まされるも出場した１７試合では４試合クリーンシートを達成し、１９失点に抑えた。長所は何といっても194㎝の身長によるスパーセーブであり、なんども試合の流れを変えるセーブを見せてきた。それに加え安定したプレーも見せておりハイボールや飛び出しの判断なども抜群である。最近ではイタリア代表にも選抜されるにまでなり、ワールドクラスのGKに成長してている。来シーズンもスパーズのゴールを守ってほしい。

CBミッキーファンデフェン

　ポステコグルーのハイライン戦術を支えているのはこの選手といっても過言ではない。プレミア史上最速の時速37キロを記録するなど圧倒的なスピードでハイラインの裏を守り、対人や競り合いも強い。この選手も今シーズンは怪我に悩まされているがまだ23歳と若いのでこれからが楽しみな選手である。

MFジェームズマディソン

レスターから加入した攻撃的MFで、圧倒的なテクニックとセンスでスパーズの攻撃を組み立てており、スパーズの10番を背負っている。今シーズンは27試合9ゴール５アシストを記録している。質の高いウィンガーを要するスパーズで見事にボールを供給しゴール前ではクロス、シュートなど多彩なプレーを見せてくれます。さらにビルドアップなど低い位置でのボール回しにも参加し、リズムを作っています。しかしこの選手がいないときはボール回しが停滞し、攻撃のアイデアに欠けることが多くあり、攻撃の面でこの選手に依存してしまいがちという弱点もあります。28歳とまだ活躍できる年齢なので代表でもクラブでも頑張ってほしいです。



５.最後に

　今シーズンは不調が続いていますが、選手の質も高く、若く有望な選手がたくさんいるのでソンフンミンなどベテランなどといいチームを築いて、長年遠ざかっているCLの舞台で活躍していってほしいと思います。読んでいただきありがとうございます。

チェルシーFC　24/25 シーズン総括

79回生　破壊神おたふくマン

1 主な夏移籍(ポジション・年齢・移籍相手・移籍金)

獲得：

・トシン アダラバイヨ (CB・27・フラム・フリー)
・ペドロ ネト (WG・25・ウルブス・6000 万€)
・デューズバリーホール (MF・26・レスターシティ・3540 万€)
・マルク ギウ (CF・19・バルセロナ・600 万€)
・フィリップ ヨルゲンセン (GK・22・ビジャレアル 2450 万€)
・レナト ヴェイガ (SB.CB.MF・21・バーゼル・1400 万€)
・ジョアン フェリックス (MF.WG・25・アトレティコマドリード・5200 万€)
・ジェイドン サンチョ (WG・24・マンチェスターU・ローン移籍)

放出：

・コナー ギャラガー (MF・25・アトレティコマドリード・4200 万€)
・イアン マートセン (SB・23・アストンヴィラ・4450 万€)
・ルイス ホール (SB・20・ニューカッスル・3300 万€)
・ロメル ルカク (CF・31・ナポリ・3000 万€)
・ハキム ツィエク (WG・31・ガラタサライ・フリー)
・チアゴ シウバ (CB・40・フルミネンセ・フリー)
・トレヴォー チャロバー (CB・25・クリスタルパレス・ローン移籍)
・レスリー ウゴチュク (MF・20・サウサンプトン・ローン移籍)
・アルマンド ブロヤ (CF・23・エヴァートン・ローン移籍)
・ケパ アリザバラガ (GK・30・ボーンマス・ローン移籍)
・ラヒーム スターリング (WG・30・アーセナル・ローン移籍)
・ジョルジェ ペトロヴィッチ (GK・25・ストラスブール・ローン移籍)
・アルフィー ギルクリスト (SB・21・シェフィールドユナイテッド・ローン移籍)
・アンドレイ サントス (MF・20・ストラスブール・ローン移籍)

ここ近年のボーリー政権下のチェルシーは大金を投じて将来有望な若手を大量に獲得してきたが、今年は相変わらず出入りは激しいものの、比較的低い金額の支出に抑えた。また、膨れ上がっていたスカッドをローン移籍などで大量に放出することでこれを整理することに成功した。

(←左から共同オーナーである
ベハダ・エグバリ、トッド・ボーリー)

2 前半戦の好調の要因

ポチェッティーノを解任し、マレスカ体制一年目となった今季のチェルシーは、第一節マンチェスターシティ戦の敗北以降第16節まで10勝4分2敗と好調が続いた。その要因は、選手個々の成長、カップ戦での大胆なターンオーバーによる怪我人の少なさ、そして、マレスカの戦術にあるだろう。

(←エンツォ・マレスカ)

3 主な冬移籍

獲得：

・マティス アムグー (MF・19・サンテティエンヌ・1500 万€)

・トレヴォー チャロバー (CB・25・クリスタルパレス・ローンバック)

放出：

・チェーザレ カサデイ (MF・22・トリノ・1300 万€)
・アクセル ディサシ (CB・27・アストンヴィラ・ローン移籍)
・ジョアン フェリックス (MF.WG・25・AC ミラン・ローン移籍)
・レナト ヴェイガ (SB.CB.MF・21・ユヴェントス・ローン移籍)
・カーニー チュクウェメカ(MF・21・ドルトムント・ローン移籍)
・ベン チルウェル (SB・28・クリスタルパレス・ローン移籍)

冬移籍では、飼い殺し状態のチルウェルと、ほぼカップ戦要員となっていた他 5 人を放出。そして負傷離脱のフォファナの穴を埋めるためにチャロバーを呼び戻し、アムグーも獲得した。

4 後半戦

前半戦とは打って変わって不調に陥った。理由は戦術が対応され始めた上に、ジャクソンやマドゥエケの怪我、パーマーの不調が重なったことだろう。しかし、ここでマレスカは第26節アストンヴィラ戦からネトの運動量とスピードを活かした CF 起用により縦に速いサッカーを展開し、停滞していた攻撃を活性化させた。あとは怪我人の復帰とパーマーの不調脱出を待つばかりだ。

(←左からジャクソン、パーマー、マドゥエケ)

5 期待の若手

最後に、本題からはずれるが、チェルシーの次世代を担う期待の若手を紹介する。

ｉエステヴァン ウィリアン

右 WG を主戦場とする 17 歳で、プレイスタイルがメッシと似ているためメッシーニョの愛称をもつ。縦へ突破してクロスを入れ、あるいはカットインして左足から強烈なシュートを

放つ。マーカーの体重移動を見極めてからドリブルのコースを選択するので、DF としては止めるのが極めて難しい。チェルシー加入は 25 年夏。

ⅱ タイリック ジョージ

イングランド国籍をもつ 19 歳の左 WG。チェルシーの下部組織出身で、トップチームの試合にもしばしば出場している。カットインからのシュートが得意。

ⅲ ケンドリー パエス

カイセドと同じくエクアドル代表の 17 歳で、ポジションはトップ下やインサイドハーフ。優れたボディバランスや展開力、冷静なボールコントロールを武器として、積極的にゴールに関わる。チェルシー加入は 25 年夏。

ⅳ ジオバニー クエンダ

スポルティングで頭角を表した 17 歳のポルトガル人は、右 WG を本職としながら WBでもプレイ可能。圧倒的なスピードと、フィジカルで DF を抜き去る。また、休暇を返上して追加トレーニングに参加するほどプロ意識が高い。チェルシー加入は 26 年夏。

Ⅴ ダリオ エスーゴ

クエンダと同じくスポルティング所属のポルトガル人で、ラス・パルマスにローン移籍中の 20 歳。プレイスタイルはカイセドと似ており、相手の攻撃の目を潰すディフェンスが得意。チェルシー加入は 25 年夏。

現在チェルシーは、将来有望な若手を大量に獲得しており、うまくいけば数年後には欧州を席巻するだけの実力は自ずとついてくるはずなので、期待して見ていこうと思う。

Manchester United

79回生　キャッチャー（左利き）

1. シーズン前～シーズン開幕(移籍市場閉幕)

Man Utdの24-25シーズンは、前年のリーグ戦の戦いへの落胆とFAカップ決勝でCityを倒して優勝したこと、そして新オーナー就任への微かな期待から始まった。移籍市場ではボローニャからオランダ代表ザークツィーを、リールから期待の新星ヨロを、バイエルンからはオランダ代表デリフトとモロッコ代表マズラウィを、さらにPSGからウルグアイ代表ウガルテを獲得する大型補強を敢行し、希望の光が見えたかのように思えた。

２．シーズン開幕～第９節まで

前23-24シーズンはかなり期待外れな戦いをしたMan Utdだったが、それでもダロトがプレミアリーグ屈指のSBへと成長したこと、ホイルンドが移籍初年度ながら2桁得点を取ったこと、ガルナチョが左ウィングのスタメンへと成長したこと、そしてユースからメイヌーという新たな才能が台頭してきたこと等いくつかのポジティブな要素があったこと。そして前述の通りFAカップ決勝でCityを倒して優勝したこと、新オーナー就任、大型補強敢行も相まってファンはかなりの期待を抱いていたが、いざ蓋を開けてみれば第一節こそ補強完了前のフラムに新戦力ザークツィーの値千金のゴールで辛勝したものの、そこからはかなりテンハグ好みの補強をしたにも関わらず昨年に続いてビルドアップは整備されず、結局個人の質頼りの面白みのないロングカウンター戦術に頼ることとなった。結果リーグ戦では9試合で勝ち点11しか積み上げることができなかったため、第9節ウエストハム戦の敗戦と昨シーズンから改善がみられなかったこともあってテンハグは解任されることとなった。

3.第10節、第11節

テンハグを解任したMan Utdはアモリム新監督が到着するまでの間としてテンハグ監督時代にコーチだったファンニステルローイを暫定監督とした。チームの雰囲気がかなり悪い中でチェルシー戦、レスター戦という難しい二試合の指揮を任されたが、2試合で勝ち点4と「アモリム監督は最高の監督だから彼を完全に信頼するように」という最高のコメントを残してアモリム監督にバトンを渡した。

4.第12節～

現在の過密日程の試合日程の中、シーズン中に監督を交代し戦術を浸透させることは容易ではない。ましてやテンハグとアモリムというタイプの違う監督同士となると尚更だ。結果として新監督就任がしても課題である得点力不足、個々の連携不足、脆い守備陣形、個人の怠慢プレーによる失点など山積している課題は依然解決していなかった。

5.冬のMarket

冬の移籍市場ではユナイテッドはリースからウイングバッグの新戦力としてドルグを獲得し、長年の10番Rashfordと前オーナー時代の負の遺産Anthonyをレンタルで放出した。

6.見えてきた根本的な課題

しかし彼らは移籍先でいい活躍を見せている。ではユナイテッドでは何が問題だったのか。サンチョがドルトムントとチェルシーで活躍していることを考えるとやはりクラブカルチャーとして勝利への貪欲さが失われてしまっているのだろう。さらに言えばやはり苦しい時チームを救うエースストライカーやキャプテンが不在なことも大きいと思われる。若いFW陣はまだ頼りなく、またブルーノフェルナンデスはプレーは世界トップレベルだがキャプテンとしての脂質はまだ少し乏しいように感じてしまう。

そして前オーナーが設備投資しなかったことによる時代遅れの練習施設やフィットネスチームなど様々な問題をSrラトクリフが解決することは急務だ。

7.今後への期待（特に来シーズン）

やはり腐っても伝統的なクラブの監督としてアモリムは結果が求められるが、現状はまだ厳しいものがあるかもしれない。しかし、チドオビマーティンを始めとしたユースの若い才能が台頭してきていること、そしてコビーメイヌーを初めアレハンドロガルナチョ、レニーヨロなどトップチームの核となっていく選手達がまだ若く成長が期待できることを考えれば4.5年後のトップチームの未来は明るいかもしれない。

またスポルティングでの実績を考えればアモリムならばかつてのような劣勢に強い赤い悪魔のスピリットを取り戻してくれるかもしれないと期待してしまう。目先の結果にこだわらず勝利に貪欲に、かつての強さを取り戻して欲しいと思う。

レアル・マドリード24-25前半戦振り返り

79回生　リットン

史上最多、15回の欧州王者を誇る白い巨人は、待望のエムバペ加入により史上最強との呼び声高いチームとなったが、開幕直後の試合では絶不調へと陥った。主たる原因としては

①クロース引退によるゲームメーカーの不在

②エムバペとヴィニシウスの悪すぎる相性

③相次ぐDFの怪我

である。

①クロース引退によるゲームメーカー不在

「レアル・マドリードの心臓」と呼ばれ、ビルドアップ、ポゼッション、チャンスメイクにおいて極めて重要な役割を果たしたクロースが引退した現在、中盤はバルベルデ、ベリンガムをはじめとするアスリート能力に長けた選手で構成されている。ゲームの流れを読み、コントロールすることができる選手がチーム最年長の大ベテランのモドリッチのみとなってしまったが、長年ローン移籍を繰り返し、ベンチを温め続けたセバージョスの台頭し、安定した中盤が築かれつつある。

②エムバペとヴィニシウスの悪すぎる相性

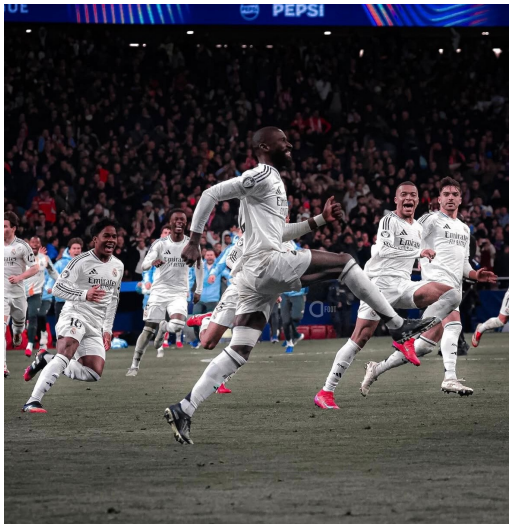
両選手ともに左寄りの位置を得意とするため、4-3-3のシステムでどちらを真ん中に配置しても2人とも左サイドに流れるという現象が多発した。また、開幕以降、エムバペの不調により名将アンチェロッティ監督の采配のブレも見られた。しかし、エムバペが2戦連続PKを失敗した時期を経て復調を見せ、圧巻のプレーを見せている。ここで問題となるのはヴィニシウスの緩慢な守備である。モドリッチやベリンガムが試合中に激怒するほど攻守の切り替えを怠り、中盤より後ろの選手の負担が増えている。エムバペ、ヴィニシウスというスピードスターが連携の取れたプレッシングをすることで、よりショートカウンターによる得点が見込まれるだろう。

③相次ぐDFの怪我

10月にカルバハルが前十字靭帯断裂、11月にはミリトンも前十字靭帯断裂し、同日にバスケスがハムストリングを負傷したことにより主戦場をDFとする選手がメンディー、フラン・ガルシア、リュディガー、バジェホのみとなってしまった。そのため、チュアメニがCB、バルベルデがRBへとコンバートされて凌ぐ羽目となった。しかし、この期間に下部組織からトップチームへと昇格したラウール・アセンシオが安定感がありながらも闘争心を前面に出す、セルヒオ・ラモスを彷彿とさせる活躍を見せ、鉄壁のディフェンスラインが形成されつつある。

以上のように、前半戦はアクシデントが多かった印象ではあるが、世代交代の過渡期にあるとも言える。右袖の数字が16になることを祈念してこの記事の括りとする。

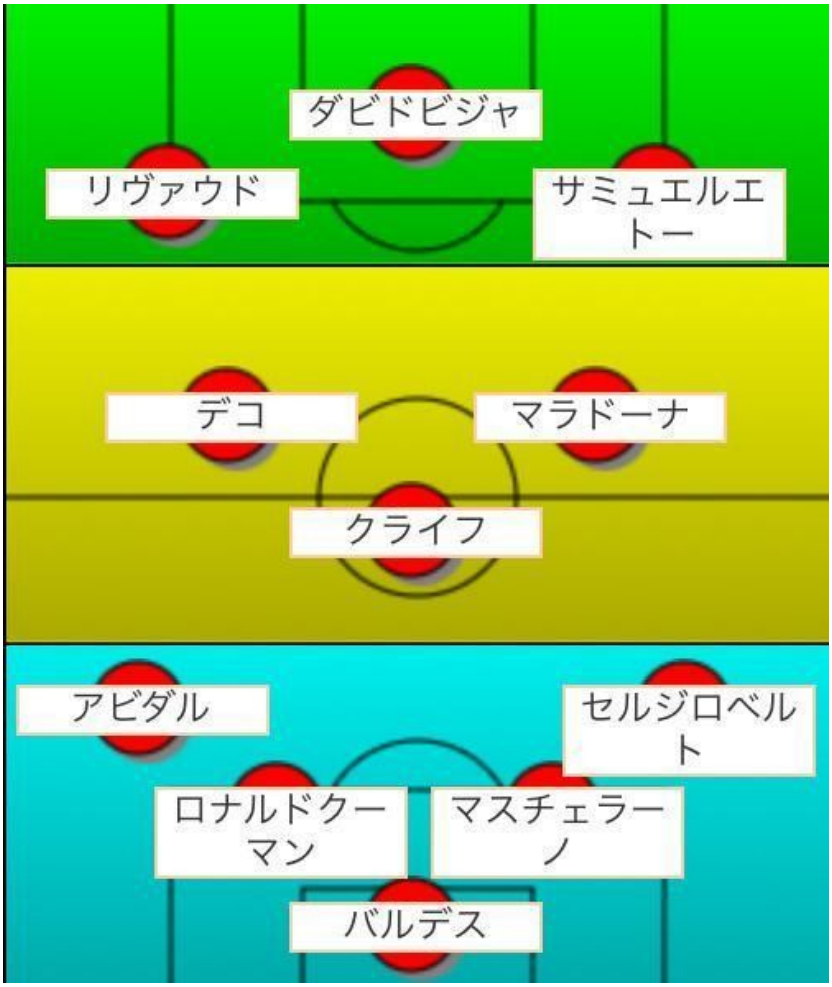
¡Hala Madrid!



昔のバルセロナを振り返る
～僕の好きな選手たち～

79回生　梅西じん

僕が思う昔のバルセロナのベストイレブン（ただし、メッシなどのありがちな選手は除く）※一部の選手は「昔」と言うには新しいかもしれないがそこは勘弁してください



特に触れたい選手

1. リヴァウド

バルサの歴代アタッカーの中でもトップレベルに好きな選手。
STだけでなく、どのポジションでもプレーしていた（やらされていた）。まさに神のような選手。単純に技術力が高く、どこでプレーしても上手かった。
「史上最も美しいハットトリック」でも有名。もっと評価されてもいいと思う。

2. サミュエル・エトー

同じく個人的に好きな選手。
若い頃、レアル・マドリードのユースから追い出されたことを根に持ち、プロになってからエル・クラシコなどでレアルをボコボコにしていたところが特に好き。
一番の印象は、とにかくスピードが速いこと。
2009年のチャンピオンズリーグ決勝（対マンチェスター・ユナイテッド、2-0）の先制点が特に印象的。

2010年のチャンピオンズリーグ準決勝でバルサがインテルに負け、そのままインテルが優勝したのも、エトーがインテルに移籍したせいだと思っている。

3. ダビド・ビジャ

バルセロナ史上、3本の指に入るストライカーだと思う。
バルサだけでなく、スペイン代表での活躍もセンセーショナルだった。
2011年のチャンピオンズリーグ決勝（対マンチェスター・ユナイテッド、3-1）のミドルシュートは、全盛期のビジャを象徴する一撃だったと思う。
裏抜けなど全般的に技術が高く、特に決定力が抜群。両足とも正確にシュートを打つことができ、全盛期では得意の裏抜けが成功したらほぼ確実に決めていた。

4. エリック・アビダル

肝臓に腫瘍がありながらも復帰し、チャンピオンズリーグ優勝時にはキャプテンとしてビッグイヤーを掲げた。
1対1の守備、ヘディング、スタミナの全てにおいて優秀だった。
驚くほどの安心感があり、個人的には総合的に見てジョルディ・アルバを超えていると思う。
普段の練習でポジション的にマッチアップする相手がメッシだったから、自然と守備が上手くなった可能性もある。
圧倒的に過小評価されている選手の一人。（画像は次ページ）

（エリック・アビダル）

5. ロナルドクーマン

チャンピオンズリーグ決勝の延長戦で決めたフリーキックは、大会全体で見ても素晴らしいゴールの一つだと思う。

監督としての実績はやや物足りなかったが、バルセロナの暗黒期にチームを率いてくれたことには感謝している。

ラマシアについて

79回生　baller

皆さんはラマシアという言葉はご存知でしょうか。ラマシアとはスペインの名門バルセロナの育成組織のことを言います。ラマシアにはスペインを中心に世界中からサッカーエリートが集まり日々しのぎを削っており、育成組織の質としては世界最高峰といえるでしょう。今回はそんなラマシアについて詳しく紹介していきたいと思います。

-なぜラマシアは優れているのか-

世界には無数の育成組織がありその中で日々プロを見据えて選手たちが切磋琢磨しています。そして育成への関心が高いヨーロッパでも特に高い評価を得る育成組織がいくつかあります。イングランドのチェルシー、オランダのアヤックス、そしてラマシアなどです。これらのクラブはスカウト網をヨーロッパ中に持ち、有望な若手を勧誘し、ハイレベルなトレーニングを課すことで優秀な選手を輩出、プロサッカー界に送り出します。当然ラマシアもこの過程を踏むわけですが、ラマシア出身の選手の優秀さ、特異さは彼らの受けるトレーニングにあります。

ヨハン・クライフに始まり、グアルディオラが育て、完成させたバルセロナの哲学とはまさにボールプレーです。イングランドがロングボール、フィジカル重視の大味なサッカーを、イタリアが堅い守備をベースとしたサッカーをしていた中、バルセロナが目指したのは高い技術力によってボールを支配することでした。そのために必要なのは「高い技術力を持つ選手」でした。そうしてバルセロナのフットボールができる選手を育成するためラマシアがつくられこの理念は今も変わっていません。

このように育成された選手は、多くがプロの道に進み成功をおさめます。近年のフットボールをけん引したメッシ、イニエスタ、シャビ、ブスケッツ、ピケ…。そして何よりグアルディオラもまた、ラマシアで育ち、バルセロナに選手、そして監督として携わったのです。

-現在のラマシア-

現在もラマシアは非常に高いレベルで機能しています。ヨーロッパのトップリーグで活躍する選手はもちろん２部や３部などのリーグを含めるとかなりの数のラマシア生がプロサッカー選手として活躍しています。レバークーゼンでゴール、アシストを量産する左サイドバックのグリマルド、一時バルセロナに復帰したフィジカルモンスターのアダマトラオレ、プレミアリーグの名門マンチェスターユナイテッドのゴールを守るアンドレオナナ、今冬マンチェスターシティに移籍したニコゴンザレス、EURO制覇に大きく貢献したマルककककレジャ、そして日本の至宝、久保建英などはすべてラマシア出身です。そして彼らの多くはトップデビューすらかなわなかった、もしくはデビュー後もトップチームに定着できず他クラブへ移籍した選手たちです。これこそバルセロナというチームでプレーする難しさを示しているでしょう。

そんな中でも近年のバルセロナは非常に多くのラマシア出身のカンテラーノが在籍しています。

その一部を紹介しましょう。

パウクバルシ（Pau Cubarsi）2007/1/22

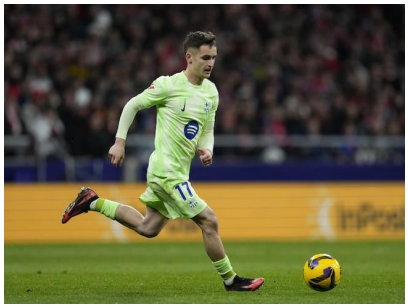
2023/24シーズン途中にシャビ監督によってバルサアトレティック（バルサB）から引き上げられ、今シーズンからは絶対的なレギュラーとなった若いセンターバックです。一番の強みはボール保持能力。すでに縦パス、フィードともに世界屈指のレベルにあり、バルサのポゼッションに欠かせない存在の一人です。守備能力も高く、 クリーンで安定した守備でチームを支えています。

アレハンドロバルデ（Alejandro Balde）2003/10/18

爆発的なスピードとドリブルが武器の左サイドバックです。デビュー当時からの課題であった状況判断が大きく改善され、今シーズンはチームの左サイドの攻撃を担っています。

ジェラール・マルティン（Gerard Martin）2002/2/26

2023/24シーズンにバルサアトレティックに入団しておりラマシアでの在籍期間はそこまで長くありません。ただ今シーズンは初のスペイン一部で日々成長を遂げ、バルデのバックアッパー以上の存在になろうとしています。バルデとは異なり、フィジカルの強さや堅実さが武器の左サイドバックです。この二人がいる左サイドバックは当分の間、安泰でしょう



マルクカサド（Marc Casado）2003/9/14

昨シーズンまでバルサBのキャプテンを務めており、今シーズンからトップチームに昇格しました。開幕スタメンを飾った17歳マルクベルナルが第三節ラージョ・バジェカーノ戦で前十字靭帯断裂の大けがを負ったことで出番を得て、見事にそのチャンスをものにしました。まさにラマシア、というべきボールテクニックとチームへの献身性が光る選手です。

ガビ（Gavi）2004/8/5

昨夏前十字靭帯断裂を経験し、今冬戦列復帰したインサイドハーフです。一番の特徴はそのメンタリティで、誰にも物おじしない性格から闘犬と呼ばれることもあります。ただテクニックも確かなもので狭いスペースでのターンを得意としています。今シーズンは怪我明けということもあり出場時間は

そこまで長くありません。

フェルミンロペス（Fermin Lopez）2003/5/11

昨夏のパリオリンピックでスペインを優勝に導く大活躍を披露したインサイドハーフです。昨シーズン前のプレシーズンのクラシコでペナルティーエリア外から逆足で強烈なミドルを叩き込んだところから一躍有名となりました。今シーズンはコンディションが整いきっていないように見えますが、必ず復調してくれると思います。

ダニオルモ（Dani Olmo）1998/5/ 7

今夏ライプツィヒから獲得した、ライン間でのターンやゴール前での狭いスペースで技術を発揮できる選手です。16歳で一度バルサを去り、クロアチアのディナモ・ザグレブでトップデビューを果たすという特殊な経歴の持ち主です。人材が豊富な今シーズンのバルサのMFでも特に評価されている選手です。

ラミン・ヤマル（Lamine Yamal）2007/7/13

説明の必要のない選手です。ラマシアでも飛び級を続け15歳9か月16日でトップデビュー。スピード、テクニック、ボディコントロール、シュート、クロス、ラストパス、どれをとっても17歳ではありません。向こう15年のバルサの未来は彼とペドリに託されているといってもいいでしょう。

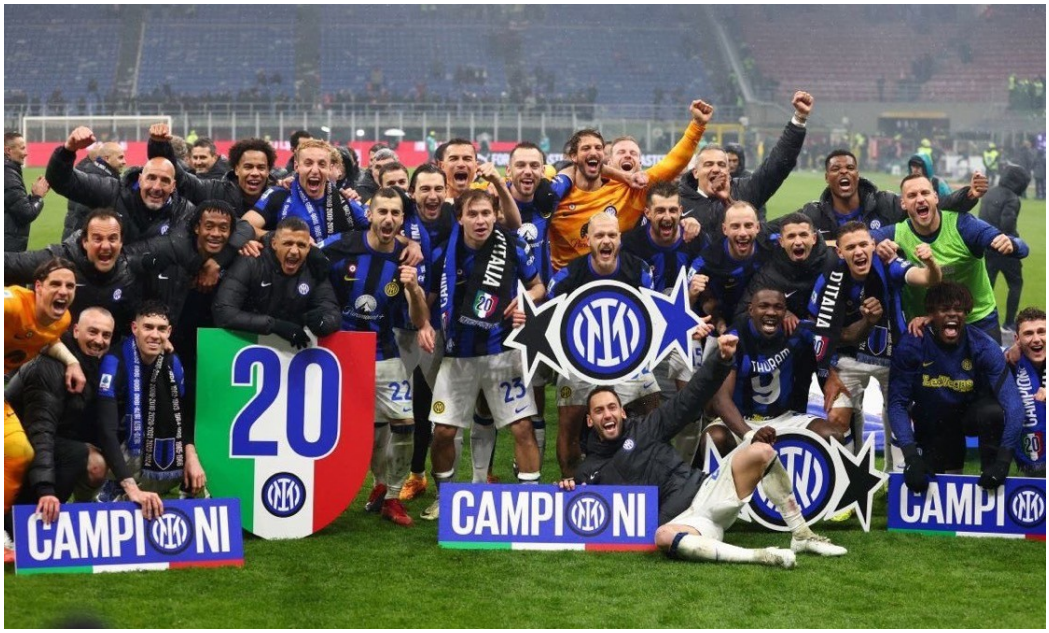
イニャキ・ペーニャ（Inaki Pena）1999/3/2

長くバルサの第二キーパーを務める彼もカンテラーノです。今シーズン、テア・シュテーゲンの離脱でようやくつかみかけたチャンスも、遅刻癖もあって逃してしまった報われないGKです。足元の技術に定評があり、課題と言われたハイボール処理も安定してきました。クラシコではエンバペを何度もストップしています。

どうでしたでしょうか。エリックガルシア、エクトルフォルト、マルクベルナルはじめ書ききれていない選手はたくさんいます。できればバルサBの選手まで紹介したかったのですが流石にしんどいですね。ラマシア、ひいてはバルセロナというクラブの魅力が伝わっていれば幸いです。

インテル　24-25

79回生　masak



SerieA 1位(執筆時点)

夏にはかねてより加入が決定していたジエリニスキをフリーで、またサンチェスの抜けたトップにはポルトからタレミを補強してシーズンが幕を開けた。またフラッテージとカルロスアウグストを買い取って完全移籍となった

In タレミ　　Out クアドラード

　ジエリニスキ　　アレクシスサンチェス

2年前にバストーニらディフェンス陣の堅守を持ち味にCLで準優勝を果たしたシモーネのチームは、昨年には4年ぶりのスクデットとスーペルコパ優勝を獲得したもののCLではアトレチコに早々にPKで敗れBest16となった。24-25シーズンはスクデット獲得と2年ぶりのコパイタリア制覇、スナイデルサネッティらを擁したモウリーニョ政権時代のトレブル以来となるCL優勝を目指す戦いとなる。(現在Best8まで残っている)

インテルの強み

まず23夏にアンドレ・オナナが抜け、空きポジションとなったGKとして補強したヤンゾマーが期待以上の活躍でここまでチームを後ろから支えている。そこにバストーニを始めとしたバックス陣が鉄壁を築く。インテルのチームスタイルで最も特

徴的なものの一つであると言えるのはやはりスリーバックの攻撃参加であろう。パヴァールやバストーニといった脇の選手がゴール前に出てシュート放ったりクロスをあげるのはこのチームならではなのではないかと思う。ディマルコ、デュンフリース、アウグストらウイングバック陣も安定したパフォーマンスを見せている。ピッチを縦横無尽に駆け回るバレッラ、キック力が抜群なチャルハノールを中心とした中盤も強固でフラッテージ、ムヒタリアンら控えの層も充実しておりローテーションもしやすくなっている。過密日程な現代サッカーにおいて選手層の厚さは重要であり、その点ある程度控えが出てきてもやれるというのはインテルの大きな強みだろう。FW陣は序盤からテュラムが絶好調でチームを牽引し、今シーズン初めは不調に苦しんだエースのラウタロもコンディションをあげ

(怪我してしまったが。。)首位の座をナポリから奪い返した。このツートップはとても相性が良く、テュラムはツートップの一角としてあえて潰れることでラウタロのプレースペースを確保して得点につなげてきた。

やはりこのチームの強みは堅守と、破壊力こそないがセリエAトップの得点力を持つ安定した攻撃力だろう。

２年ぶりのCL決勝そして15年振りの優勝、セリエA連覇に向けてラウタロが怪我から復帰する予定であることを考えると今年は優勝を狙える位置にいると言えるだろう。今年こそは！！

アタランタから見るマンツーマンプレスの攻略法

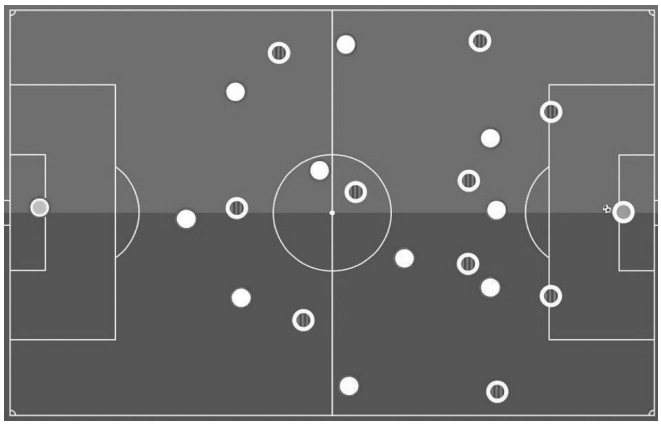
80回生　違反賭兄

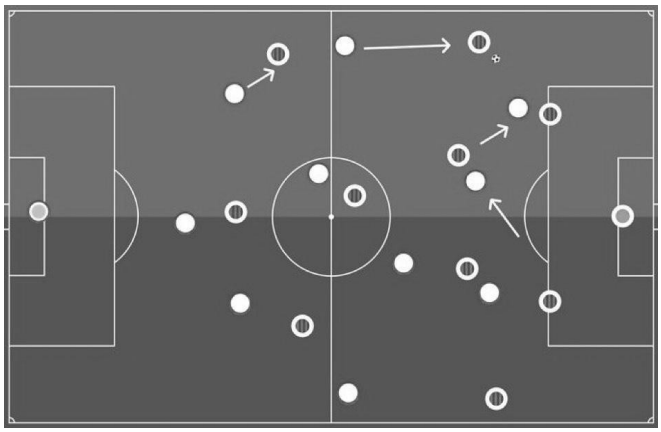
2024年4月3日現在、セリエA3位につけているアタランタ。

昨季はヨーロッパリーグも制覇し16/17シーズンにジャンピエロガスペリーニを招聘して以来成長し続けている。ガスペリーニ率いるアタランタは、独自のマンツーマンプレスで知られている。このプレスは、従来のハイブリッドプレス（ゾーンプレスとマンマークの融合）の形の一つだ。一般的なハイブリッドプレスはゾーンディフェンスを基盤に発展してきたが、ガスペリーニのシステムはマンツーマンを基本として構築されている点が特徴的である。アタランタのプレスは、状況に応じて慎重にマンツーマンへと移行する。ここで重要なのは、相手に過剰に食いつかないことだ。マンマークにおいて必要以上に食いついてしまうと、守備陣が広大なスペースで1対1の状況にさらされるだけでなく、相手への圧力を失い、最終的にプレスが破綻するリスクがある。この戦術の特性と弱点をより深く理解するために、チャンピオンズリーグのアタランタ対バルセロナ戦を例に挙げ、アタランタのプレスの仕組みとその攻略法を詳しく見ていこう。

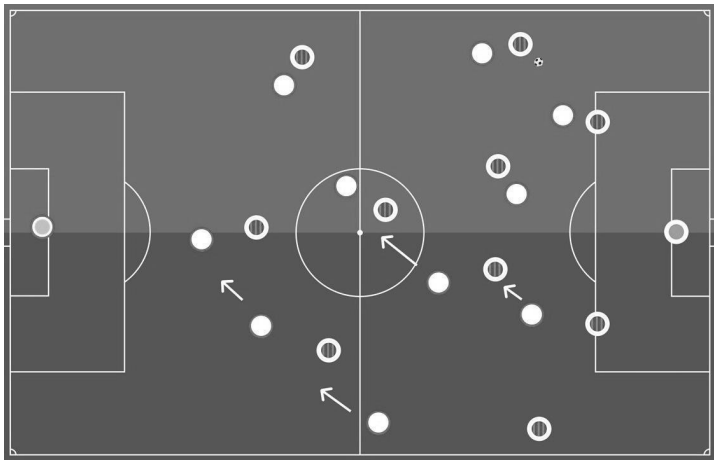
アタランタのマンツーマンプレスの仕組み

これは、バルセロナのビルドアップに対するアタランタのプレスの開始時の配置だ。アタランタのプレスは、相手がサイドでビルドアップを始めると、マンツーマンの形になるように設計されている。





このようにボールがアタランタの左サイドで前進すると、その瞬間にマンツーマンへと移行する。

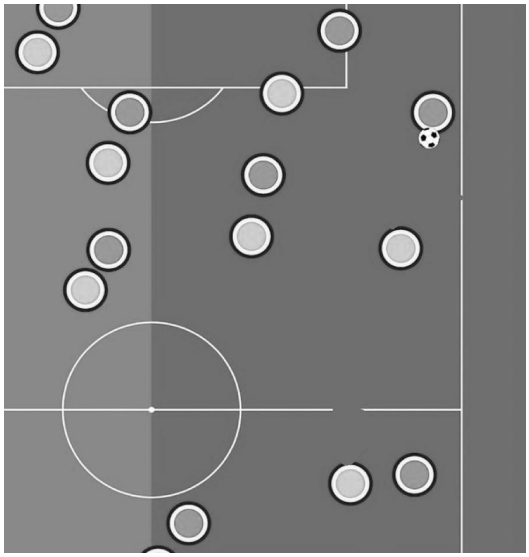


一方で、逆サイドの選手は下がることでチーム全体が前に吊り出されるのを防ぐ。この「下がる」動きを適切に行うことで、チームは守備の配置を乱さず、マンツーマンへの移行時でも安定したプレッシングを維持できる。ガスペリーニのチームは、前へ飛び込んだり後ろへ下がったりと流動的に動きながら、マンツーマンを採用しつつ守備のバランスを崩さないようにしている。しかし、この戦術には弱点もある。すべてのマンツーマン戦術に共通するが、相手に時間やスペースを与えないメリットがある一方で、マークすること自体がリスクとなる。マンマークでは、相手の動きに対応しなければならないため、巧みに動かれるとマーカーを引き離されてしまう。また、アタランタのプレスは「前に出る」と「下がる」の中間段階にあるときに、サイドチェンジに対して脆弱になりやすい。

バルセロナの先制点に見るアタランタの弱点

アタランタの守備の脆さは、バルセロナの先制点にも表れている。アタランタのプレスを崩す鍵は、動きによってスペースを作り、マーカーとの距離を広げることだ。

このシーンでは、クンデがサイドチェンジを展開し、最終的に逆サイドのSBバルデの足元へボールが渡る。これにより、アタランタの左サイドは後退し、右サイドはプレスを開始する形となる。ラフィーニャとレヴァンドフスキがバルデをサポートするために下がることで、アタランタの最終ラインが押し上げられ、背後に広大なスペースが生まれる。



この移行状態での弱点の一つは、アタランタのCCBヒエンとLCBコラシナツの間に生じるスペースだ。

ザッパコスタ（LWB）がプレスに出たことで、コラシナツはザッパコスタが戻るまでヤマルをマークする必要があった。その結果、CCBのヒエンとの間に広大なスペースが生じ、バルセロナに狙われる状況となった。理論上、マンツーマン主体のシステムでは、選手がしっかりマークについていればスペースが生じても問題にはならない。しかし、実際には主導権はマークする側ではなく、マークされる側にあ

る。ヤマルは、ザッパコスタとコラシナツの守備対応を利用して、ピッチの逆サイドでフリーになることができた。

一方で、逆サイドではレヴァンドフスキが中盤でボールを受けたことで、ラフィーニャがアタランタの生じたスペースに侵入。これによってジムシティのマークが外れ、アタランタの守備は完全に崩壊した。

アタランタのマンツーマンプレスの攻略法

以上を踏まえると、アタランタのプレスを攻略する方法が見えてくる。まずはボールをサイドからサイドへ動かし、守備の弱点を探る。アタランタの守備の仕組みを利用して、スペースを生み出す。そのスペースに走ることで、マーカーとの距離を作れば良いわけだ。

2025 シーズン J1 リーグ順位予想

79回生　マコ１１

2月14日にガンバ大阪対セレッソ大阪の大阪ダービーで開幕した今季のＪリーグの順位予想をしていく（この記事は執筆時点(3月24日)での情報をもとにサンフレサポの筆者の独断と偏見で作成したものなのでチームへのコメントについては疑問を抱くこともあるかもしれませんが大目に見ていただけると幸いです）

20 位 横浜FC 昨年 J２ 2 位（昇格）

最下位予想は今年昇格した横浜FC。攻撃時の基本的にサイドからの仕掛けの形は魅力だがゴール前の迫力にかけるように見える。守備がとくに固いわけでもないため今年は残留争いになると思われる。

19 位 アルビレックス新潟 昨年 J１ 16 位

今や新潟の代名詞ともいえるポゼッションサッカーのスタイルを確立した松橋監督が昨季限りで退任、樹森監督を迎えた今期は昨季までの良さを生かしつつも新しいスタイルを模索するが、6節終了時点では未勝利と苦しい戦いになっている。

18 位 名古屋グランパス 昨年 J1 11 位

長谷川監督にとっては就任4年目となる今季は守備が6戦14失点と崩壊状態、早急に守備のてこ入れが必要だ。ただ、今季札幌から加入の浅野、復帰のマテウスなどを加えた前線の質は間違いなく高い。

17 位 京都サンガ 昨年 J１ 14 位

昨年は後半戦の巻き返しで14位フィニッシュになった京都、その立役者となったエリアス、トゥーリオ、原の3トップの怖さは健在であるがそこから攻撃の厚みをどう出せるかが今期の課題となりそう

16 位 東京ベルディ 昨年 J1 6 位

昨年昇格初年度から6位の躍進を見せたベルディ、今季は各チームの対策も進み昨季より厳しいシーズンになりそうだが城福監督の粘り強さで残留と予想

15 位 ファジアーノ岡山 昨年 J2 5 位（昇格）

昨季昇格プレーオフを勝ち抜いて初のJ1昇格を決めた岡山は、ここまで守護神ブローダーセンを中心に堅実な守りを見せている。また攻撃でもセットプレーという武器を持っており、まずは今季残留してJ1に定着していきたい。

14 位 FC 東京 昨年 J1 7 位

昨季まで新潟を率いた松橋監督の下で戦う今季はいまだに攻撃のスタイルが確立されていないようにみえる、今季シャドーに挑戦している俵積田の質が攻撃の質に直結してきそう

13 位 清水エスパルス 昨季 J2 1 位

今のJ1には珍しい下からしっかりボールをつなぐチームスタイルを秋葉監督は採用、序盤戦は調子が良かったが、やや失速気味。今後はよりゴールに近い位置でボールを回せると怖いチームになりそう。

12 位 セレッソ大阪 昨季 J1 10 位

開幕戦の大阪ダービーを5－2で勝利し最高のスタートを切ったかと思われたセレッソ大阪だが、守備陣が粘れず失点がかさみ勝ち点も伸ばせずにいる。帰ってきた中島、ユース育ちの北野など攻撃面での希望は大きい。

11 位 浦和レッズ 昨季 J1 13 位

今年行われる CWC も見据えて大型補強を敢行した浦和レッズだがここまでは前線の連携がうまくいかずなかなか得点を奪えずにいるが、マテウスサヴィオは確実に一人でチームを変えられる選手なだけにここがうまくはまると得点は伸びてきそう

10 位 湘南ベルマーレ 昨季 J1 15 位

近年残留争いに巻き込まれることが多かった湘南だが、今年はスタートダッシュに成功。チームとして戦えており前線の選手が軒並み好調のため今季は中位に入り込めると予想

９位 横浜 FM 昨季 J1 9 位

昨季から特にDFの選手は入れ替わりがあるがやっているサッカーは大きく変わっていないという印象、今季SBにコンバートされた宮市のプレーに注目したい

８位 アビスパ福岡 昨年 J1 12 位

監督を変更して臨んだ今季、持ち前の堅守に加えて奪ってから縦に速い攻撃、そこからシュートで終わるシーンを多く作れている印象。4・5・6節と3試合連続で1－0での勝利とらしい戦いをできている

７位 柏レイソル 昨年 J1 17 位

リカルドグラッサ新監督を迎えた今期はボールをつなぐスタイルを採用、ポゼッションを主に使用する他のチームとの違いはより得点に直結するようなエリアでもしっかりとした崩しをできるアイデアと強力なストライカーの存在などがあげられる。チームとしての完成度も高く今季は上位フィニッシュを予想

６位 ヴィッセル神戸 昨年 J1 １位

大迫と武藤のベテランダブルエースを擁し去年のJリーグを制覇した神戸、今年はベテラン勢に少し衰えの兆しが見えているが、これを機に新加入エリキも含めた前線の世代交代も必要になるか

５位 川崎フロンターレ 昨年 J1 ８位

川崎の黄金時代を築いた鬼木監督が退任し長谷川新監督とともに始まる今シーズン、昨季までの持ち味だったボール保持の部分は残しつつよりクロスの本数を増やしゴールに迫っている印象。

４位 ガンバ大阪 昨年 J1 ４位

坂本やダワンなどの昨季主力がシーズンオフに移籍、ウェルトンや宇佐美は開幕に間に合わずさらに山田康太の件もあり最悪のシーズン開幕となったガンバ大阪。しかし、3節終了後に広島から満田が加入すると、浮上のきっかけをつかんでいる。けが人も含めてチームがうまくまとまればトップ3入りも見えてくると予想

３位 町田ゼルビア 昨季 J1 ３位

昨季昇格初年度から旋風を起こした町田はシーズンオフに着実な補強に成功、シンプルなサッカーと選手の質で今期も上位をキープすると予想

２位 鹿島アントラーズ 昨季 J1 5 位

ここ数年リーグ上位はキープするもなかなか優勝争いとまではいけない鹿島、今季加入のレオセアラと鈴木優磨の 2 トップで着実に得点を重ねておりさらにバック陣も安定したパフォーマンスを見せている、層の薄さに懸念はあるが、主力の怪我が重ならなければ充分優勝を狙えるのではないか

1 位 サンフレッチェ広島 昨季 J1 2 位

広島はシーズン序盤から満田の移籍、トルガイアルスランの長期離脱、まさかの形でのACL2敗退など試練のシーズンスタートとなったが、それでも勝ち点を積み上げる強さがある、相手の徹底した広島対策に得点数を伸ばせていないが堅守は維持されており、スキッベ監督のやり方は十分にチームへ浸透しているため今年こそは優勝すると予想

ここまで 2025 シーズンの J1 リーグ順位予想をしてみて改めてこんなに各チームの戦力が均衡しているリーグは珍しいなと思った。今季も最終節まで白熱した戦いを期待したい。

サッカー日本代表の軌跡

79回生　クリ〇ナ

＜東京五輪を目的でなくきっかけに＞

もし半世紀以上前に東京五輪が開催されていなければ、まだ日本でサッカーはマイナースポーツの１つに埋没していた可能性があると言われている。戦後の復興を象徴する祭典がやってくる数年前まで日本サッカーには「アジアでも最弱」のレッテルが貼られていた。　しかし、他の多くのスポーツにおいて五輪での活躍が目的とされていたのに対して、サッカーは五輪をきっかけとして、指導体制やの育成体制の整備がしっかり行われてきたことがサッカーの繁栄に大きく寄与している。

＜日本サッカーの歴史＞

日本サッカーが世界レベルで初めて本格的に知られるようになったのは、1968年のメキシコ五輪。大会得点王となった釜本邦茂や、渡辺正、杉山隆一らの活躍で銅メダルに輝いた。日本サッカー協会は1991年、社団法人日本プロサッカーリーグを設立し、93年に10チームで「Ｊリーグ」がスタート。　92年には日本代表初の外国人監督としてハンス・オフト（オランダ）が就任し、W杯本大会出場に向けた本格的な態勢が敷かれた。この時期の中心選手は三浦知良、ラモス瑠偉、井原正巳、柱谷哲二ら。　強化は順調に進み、アメリカ大会アジア予選（93年）では最終予選に進出したが、イラクと対戦した最終戦（第5戦）で後半ロスタイムに同点に追いつかれ、あと一歩のところで出場権を逃した。同試合はカタール・ドーハで行われ、第4戦終了時には1位にいた日本は得失点差で韓国に抜かれて3位に。日本のサッカーファンはこれを「ドーハの悲劇」と呼んで記憶にとどめることになる。

4年後のフランス大会予選で、日本は最終予選グループで韓国に次ぐ2位に。プレーオフのイラン戦はマレーシア・ジョホールバルで行われ、延長戦をものにして悲願のW杯出場権を獲得した。

（カタール・ドーハでの試合でイラクと引き分け、W杯出場を逃して肩を落とす日本代表イレブン＝1993年10月（時事））

2002、10年には決勝トーナメント進出

1998年フランス大会の監督は岡田武史。グループリーグでアルゼンチン、クロアチアに、ともに0－1で敗れ、早々とリーグ敗退が決定。最終戦もジャマイカに1－2で敗れた。日本のW杯初得点は、中山雅史が記録した。

日本、韓国の共同開催となった2002年大会。監督のフィリップ・トルシエは、中田英寿や宮本恒靖、松田直樹、森島寛晃などのほか、小野伸二や稲本潤一、中田浩二といった1999年ワールドユース選手権準優勝組をメンバーの中心に据えた。

グループリーグ初戦のベルギーに2－2の引き分け、ロシアに1－0、チュニジアに2－0で勝ち、グループ1位で決勝トーナメント進出を決めた。決勝トーナメント1回戦ではトルコに0－1で敗れ、ベスト16で大会を終えた。

トルシエの後任にはブラジルのスーパースター、ジーコが就任。2006年のドイツ大会には3大会連続出場となる川口能活や中田英寿らのほか、中村俊輔や中澤佑二、高原直泰、三都主アレサンドロといった新戦力を率いて臨んだ。だがグループリーグ初戦でオーストラリアに1－3と逆転負け。クロアチアには0－0で引き分けたものの、ブラジルに1－4と完敗してリーグ最下位に終わった。

2006年に代表監督に就任したイビチャ・オシム（ボスニア・ヘルエッゴビナ）は、急病で翌年に退任。後を引き継いだ岡田武史がフランス大会に続き、2010年南アフリカ大会の指揮を執った。チームの中心選手は長谷部誠や遠藤保仁、本田圭介、長友佑都、大久保嘉人、田中マルクス闘莉王ら。グループリーグ初戦のカメルーンに1－0で勝利。オランダには0－1で敗れたが、デンマークに3－1で快勝して決勝トーナメントに進んだ。決勝トーナメント1回戦では強豪パラグアイ相手に0－0の引き分け。PK戦3－5で惜しくも涙をのんだ。

南アフリカ大会後、岡田武史の後任監督としてアルベルト・ザッケローニ（イタリア）が就任。攻撃サッカーを掲げて11年アジア・カップで優勝に導き、2014年W杯ブラジル大会への出場も果たした。しかし、初戦のコートジボワール戦は2-1で敗れ、ギリシア戦は0-0の引き分けに踏みとどまったものの、コロンビア戦では1-4と惨敗を喫しグループリーグで敗退した。

2018年ロシア大会は、開幕まで2カ月に迫った4月に3年間代表チームを率いたバヒド・ハリルホジッチ（ボスニア・ヘルツェゴビナ）が電撃解任され、後任に西野朗が就任。グループリーグ初戦のコロンビア戦は1-2で勝利、第2戦のセネガル戦はリードされた後に追いつき2-2の引き分けに持ち込んだ。第3戦はポーランドに1-0で敗れたものの、セネガルと勝ち点4、総得失点差0、総得点4で並び、今大会から導入された警告数の少ない方を優位とするフェアプレーポイントでセネガルを上回り、辛くも決勝トーナメント進出を決めた。決勝トーナメント1回戦で強豪ベルギーを相手に一時は2点リードしたものの、同点に追いつかれ、最後はアディショナルタイムで逆転された。

＜伝統のサムライブルー＞

サッカー日本代表の愛称は「SAMURAI BLUE」。これは代表ユニホームの青い色にちなんで、日本サッカー協会が2009年に命名したものだ。なぜ代表ユニホームが日の丸の赤ではなく青系が使われてきたのか記録は残っていないようだが、1936年のベルリン五輪に出場した際のライトブ

ルーのユニホーム以降、青が定番となっている。一時期、白や赤が採用されたこともあったが、1992年以降は一貫して青系の色が続いている。2018年大会のユニホームは古来から伝わる日本の色名で、深く濃い藍色を示す「勝色」にちなんでいる。さらに、藍色の布に白い糸で線を描くように刺しゅうする「刺し子」をイメージした模様が前面に入っている。

＜ワールドカップの日本代表戦績＞

対戦国	勝敗	得点者
1998フランス　グループリーグ敗退		
アルゼンチン	0－1●	
クロアチア	0－1●	
ジャマイカ	1－2●	中山雅史
2002日本・韓国　ベスト16		
ベルギー	2－2△	鈴木隆行、稲本潤一
ロシア	1－0○	稲本潤一
チュニジア	2－0○	森島寛晃、中田英寿
トルコ	0－1●	
2006ドイツ　グループリーグ敗退		
オーストラリア	1－3●	中村俊輔
クロアチア	0－0△	

ブラジル	1－4●	玉田圭司
2010南アフリカ　ベスト16		
カメルーン	1－0○	本田圭佑
オランダ	0－1●	
デンマーク	3－1○	本田圭佑、遠藤保仁、岡崎慎司
パラグアイ	0－0△（PK3－5)	
2014ブラジル　グループリーグ敗退		
コートジボワール	2－1●	本田圭佑
ギリシア	0－0△	
コロンビア	1－4●	岡崎慎司
2018ロシア　ベスト16		
コロンビア	1－2○	香川真司、大迫勇也
セネガル	2－2△	乾貴士、本田圭佑
ポーランド	0－1●	
ベルギー	2－3●	原口元気、乾貴士
2022カタール　12月2日時点でベスト16		
ドイツ	2－1○	堂安律、浅野拓磨
コスタリカ	0－1●	
スペイン	2－1○	堂安律、田中碧
クロアチア	1－1●　（pen 1-3）	前田大然

＜最後に＞

2026W杯での日本代表の目標は優勝であるが、個人的にも安定感やタレントの絶対数の視点から過去一のチームであると感じる。自分が受験生の年に開催のため、心置きなく観戦できることを自分自身に期待している。